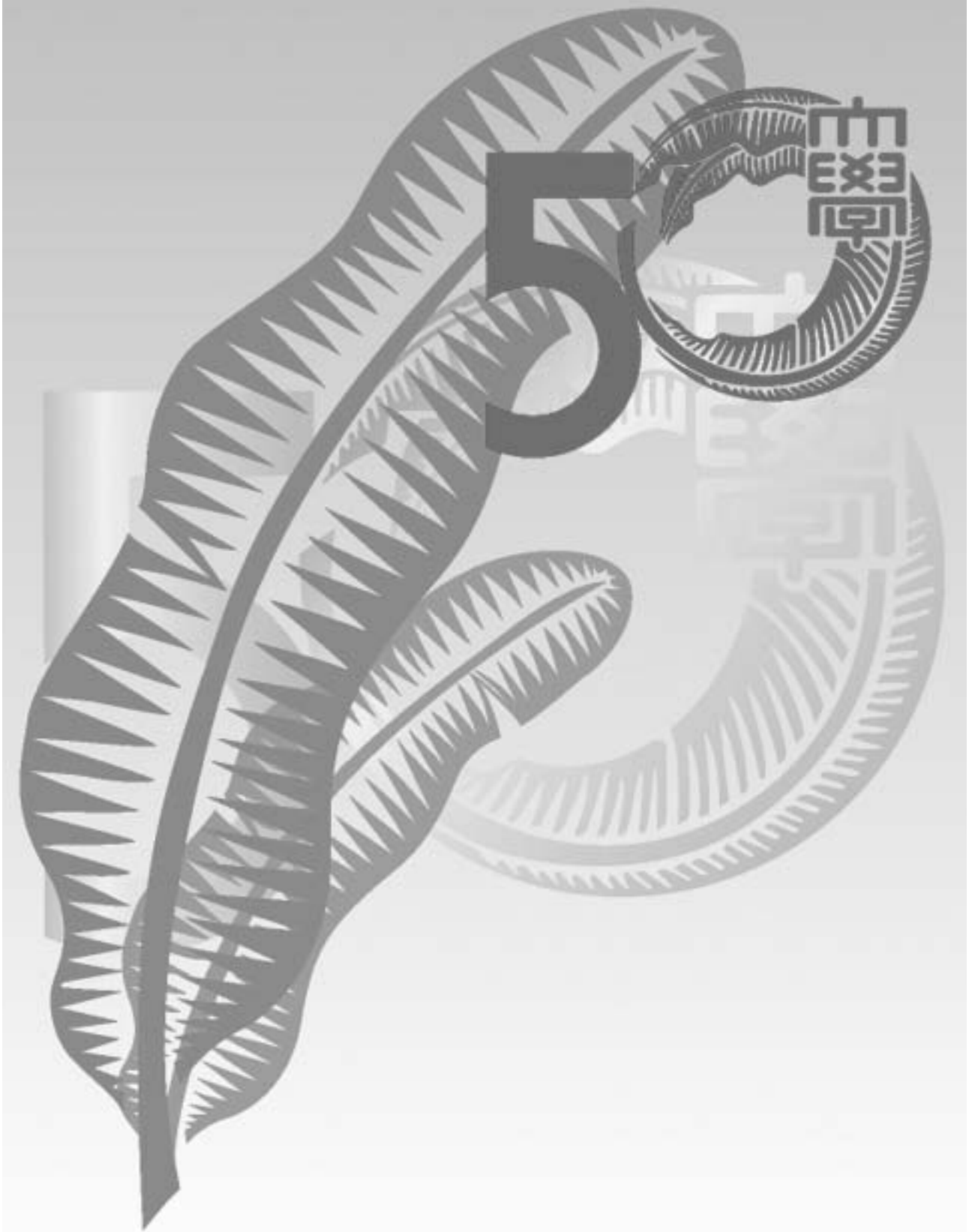
母校への想い出　母校への期待



同窓会発足の経緯（いきさつ）

琉球大学同窓会顧問・初代会長
和　気　政　雄
1期　語学部英文学科

物事は他との関連もなく、単独で動いていく事は滅多にない。何等かの形で、他の事象と関わり、関係があって、動いていくものである。琉球大学同窓会の発足も、有志等により単独に任意加入的に創られたものではなく、卒業生全員加入の形で昭和29年（1954年）12月に急遽発足した。

当時、小生は那覇高校の教諭であったが、琉大事務局に勤務中の松村圭三氏が、小生を尋ねてきて、同窓会を創くらねばならないが、貴君の名で趣意書を発送しようと思うが、と相談に来た、聞けば、志喜屋前学長の病状が悪く、何時みまかわれるかも分からぬ危険な状態にある。貴君は在学中、最も前学長にご苦労を、お掛けしているのだから、これぐらいは恩がえしの意味で引き受けるべきだろう。といわれ小生も納得せざるをえなかった。

実は在学中ある事件（学生総決起運動）をおこし、退学届けを指導教官に提出して家で寝転んでいた。そこに小生の叔父が来て、「お前は大学で何をしたのか、志喜屋学長が私の会社の事務所に来られて、“和気は君の甥のようだが、大学を退学する必要はないから戻ってくるようにと言っていた。明日から学校に出るようにとも言っていた。”」と説得された。

小生が2代目学生会長に選ばれた際も、小生の知らないところで事が運ばれたのである。初代学生会長の金城正雄君は米留に合格し、昭和26年（1951年）7月に米國に行き、学生会長は不在となっていた。学生の間では、2代目学生会長を選出する話があちこちで噂されているようであったが、小生は学生会には全く関心が無く、他人事と思っていた。ところが或る日、見知らぬ学生が小生を訪ねてきて色々人選があったが貴君が適任だと言うことで是非学生会長に立候補してもらいたい。学生会長を選出するには夏休み期間中で選挙は出来ないが、9月に入って学生が学校に戻ってからになるがと、再三にわたって学生会長に立候補を要請してきた。聞けばその学生は正本敏夫といい、小生の数少ない中学時代の後輩、正本昭二君の弟であることが分かった。素性が分かると段々話も打解けてきて、どうしても立候補してくれと、小生を訪ねて来るたびに学生会の勧誘をするようになってきた。

あまり度々来るので、小生は逆に彼自身が立候補するように薦めた、すると彼は小生が会長に当選したら自分は副会長として補佐するつもりだと応え、あくまでも小生の立候補を説得に来たとの事である。度々の来訪に拘わらず学生会長に立候補することを肯んじなかったが、９月にも入り、相手の素性も分かりあまり度々訪ねて来るので、貴君がそういう心算なら立候補してもよいと応えてしまった。すると途端に、学内中に学生会長選挙のポスターが貼られ小生の名前が宣伝された。立候補者は小生以外にも２、３名いたようだ

が、意見発表には、小生は何の意見・計画も持たないので、別人の候補者名をあげて選挙票は其の人に投票するように意見発表をした。それにも拘わらず、開票結果は殆どの選挙票が小生に入っていたとのことで、あれほど選挙を固辞したにも拘らず、小生に選挙票が流れた事は何か学生側に企てがあるのだろうと警戒する気持ちも持った。学生会長在任中、逍遥歌の募集と大学バッジの図案募集を学校側に提案し、逍遥歌の歌詞には新川豊君、バッジ図案には国博次君が当選し学園祭に披露された。学生会の動きとしては何事も無く、昭和２６年は過ぎたが翌年２月も過ぎ３月に入ると、学生は続々と退学し始めた、それまで日本渡航は禁じられていたが、渡航が解禁され自由に日本の大学に入学が出来るようになり、更に日留制度が出来たことである。学生はどんどん退学し、開学当時600名を越えた学生数も僅か百数十名になり、それに大学事務局の人事上の不備さから学生の間に不満が横溢し何時ストライキが起こっても不思議ではないような不穏な空気が流れはじめた。

或る日、突然に学生総決起の檄文が大学掲示板に貼り出され、学内は騒然となった。学生は学生大会の開催を要求するし、授業を放棄する等、収拾の付けられない状況になったので大学側は学生会に数時間の余裕を与えてくれた。

小生は講堂に全学生を集め、学生側の要求をとり上げた、この頃には新１年生も加わり、新入の１年生すら不満を発言するようになってきた。

このような状況で大学側と学生側との間にあって大学にも嫌気がさし、前述のように退学届けを指導教官に出し家で寝転んでいたのである。

４月も過ぎゴールデンウイークも過ぎる頃には学内も平穏になり、小生も大学に帰り卒業準備に取り掛かった。全く悪夢の１年であった。

志喜屋前学長は、昭和30年１月に逝去され、２月には那覇高校の校庭で市民葬が行われ琉球大学同窓会も葬儀に参列することが出来た。

重点課題と同窓会の活動

又　吉　慶　次
１期教育学部教育学科

母校の琉球大学同窓会創立50周年まことにおめでとうございます。

初代の和気政雄会長はじめ、歴代の会長ならびに役員の方々そして関係者の皆様のご労苦とご功績に心から敬意と感謝を申し上げます。

安次富長昭氏が第5代会長に選任されたあと私は花岡恵林氏の後任として事務局長を命じられました。さらに大城盛三氏が第6代会長に選任されてからも、私は再任となり、平成2年9月末日まで勤め、後任の平良善一氏へ引き継ぎました。在任3年2ヶ月でした。

同窓会は総会で決まった「重点課題」の実現をめざし懸命に努力しました。それでは、その努力の結果がどうだったのか、昭和62年度から平成2年度までの「重点課題」と関連させ、全体としての会活動を述べます。

組織の強化（昭和62年度～平成2年度までの重点課題）

同窓会本部としては主に支部の結成に努力しました。宮古支部・関東支部・浦添市役所支部は昭和61年度以前、すでに結成されていました。その後、昭和62年度奄美支部、平成元年度那覇市役所支部、平成2年度関西支部、八重山支部が結成されました。昭和63年度からは支部結成の予算も計上されました。

事業募金の継続推進（昭和62・63年度の重点課題）

同窓会の再建と活性化を目ざし、昭和59年7月に臨時総会（第4代会長に富永元順氏を選出）が開催され、その時の決議によって同窓会の事業募金は開始されました。つまり、第4代富永元順会長の時に募金が始まり、第5代安次富長昭会長に代ってからは、第2次の趣意書を作り募金を継続、さらに第6代大城盛三会長の時は募金そして締めくくりの最終報告がなされました。３代の会長、５年の歳月、募金協力者4,201名、募金総額19,952,500円の事業でした。同窓会員の団結力の強さと、同窓会活動の連続性の大切さを強く感じます。なお、本募金により次の事業が実施されました。

①同窓会会員名簿の発行（B5版、964頁）
②琉球大学移転統合記念事業への200万円の援助
③琉球大学の歌「雲よ湧け千原の空」の制定への援助
④「首里の杜の碑」の建設

琉球大学開学40周年記念事業募金への協力（昭和63年度、平成元・2年度の重点課題）と**同窓会会報の自宅送付の推進**（平成元年度の重点課題）

同窓会としては今回の募金は主として文書による方法をとり、特に募金趣意書等は会員の職場ではなく、自宅へ郵送することを決めました。しかし、郵送するには一人でも多く

の会員住所の把握が必要であります。これには同窓会発行の昭和61年版同窓会会員名簿の活用と、それ以後の新しい資料については、官公庁、銀行、会社等に勤務する同窓会役員や同窓会員の協力で得たものを利用しました。前者と後者を合わせて約11,000名の住所が把握できました。

時あたかも同窓会報第2号が発行されました。同号では1頁全面を使い大城会長から同窓会員への母校開学40周年記念事業募金への協力依頼文が掲載されていました。そこで、同号と募金の趣意書、振込用紙等を同封し同窓会員の住所あて発送しました。会報はその後も第3号、第4号で募金への協力を呼びかけました。第5号では記念事業募金の終了と、同窓会員の協力者1,324名、募金総額15,106,000円（平成3年1月10日現在）であったことを報じています。5年にわたる同窓会事業募金が続いた直後にもかかわらず、このように協力を惜しまなかった同窓会員の母校を思う心に頭が下がります。

会費（年会費）（昭和62年度の重点課題）と**終身会費**（平成2年度の重点課題）

会費（年会費）の徴収は経費面、事務量の面からも実情と合わなくなっていたので、この件は年度初めから執行部会や評議員会で検討されていました。県外の大学を調べたところ、会費は入学時に一括徴収となっていました。昭和62年最後の評議員会で慎重な審議の結果、次のことを昭和63年度総会へ提案することを決めました。

①入会金千円を1万円に改め昭和64年4月1日（後の平成元年）から施行すること。

②会費（年会費）については改正の必要があるので今後検討すること。

昭和63年度の総会では上記①が議決されました。翌年の平成元年の総会では会費（年額千円）を終身会費1万円に改めました。これと関連して、入会金1万円を納入するようになった入会者（平成元年以降の入会者）からは、終身会費の徴収を当分の間保留するとなりました。

入会金の増額については、入学生や父母、家族の方に負担増をかけることで、評議員会は苦渋の決定をしました。この改正により、かって会の運営費の逼迫（ひっぱく）に急遽（きゅうきょ）役員一人当たり1万円を拠出したような事態も無くなり、同窓会の財政は安定しました。それだけでなく、同窓会会報の発行や在学生課外活動援助費を大学へ贈呈する等の事業も行えるようになりました。

同窓会会員名簿の整備と事務局組織の強化（平成2年度の重点課題）

同窓会会員名簿の整備については、名簿研究委員（４名）も決まっていましたが、事務局の多忙さもあって十分な活動はできませんでした。事務局組織の強化の人事については予算の関係もあって実現できませんでした。

以上、「重点課題」と関連させて全体的な会活動を述べました。同窓会は「重点課題」の外にも、いくつもの大切な活動を行いましたが、紙数の都合上割愛しました。なにしろ15年～18年前のことなので、記憶違いや、誤りがあるのではないかと心配であります。その際はお許しをお願い致します。母校と同窓会の益々の発展を心からお祈り致します。

琉球大学と共に歩んだ50年

琉球大学同窓会顧問
安次富　長　昭
２期　教育学部美術工芸科

琉球大学同窓会発足から50年、それは私たちが1954年琉球大学を卒業して、満50年になるということでもあり、感慨無量である。

1950年、琉球大学開学のとき応用学芸部芸術科（後に美術工芸科）に第一期生として入学し、喜び勇んで大学に来てはみたものの、校舎は粟石造り赤瓦葺二階建の本館（事務局と講堂で、これだけは立派な建築）を中心にして、南北にそれぞれ四棟ずつ赤瓦木造平屋の教室が並んでいたが、内部は、机、腰掛も無くガランとしていた。

大学は当初全寮制で、入学時の携行品の中に、電球、コード、ソケット、机、腰掛および備品製作用具（註、手工具のこと）とあったが、大学に来てその意味がよく分かった。開学数日前に入寮し、その日から早速、寮や校舎の電気配線工事や机、腰掛、寝台などの製作で、まるで大学に労務に雇われて来たみたいだった。因に、当時は授業料を支払う必要もなく、大学から労務賃（？）として時給４円（米国軍票のB円）が支給され、月に500円程度貰っていた。その中から450円の寮の食費を納めてもなお余りがあり、映画賃や小遣い銭まで出たのだから暢気（のんき）な話である。寮のコンセットは日中はサウナ風呂のように暑く、室内にはとても居れなかった。実技の作品製作は全て教室でやり、日暮に「下駄割坂」（今の瑞泉門の石段あたり）を這うようにして寮に帰ってきたものである。

私たちの在学中は、本土から一流の芸能人が次つぎとやってきて那覇の国際劇場や大洋劇場などで公演をやった。例えば、歌手の近江俊郎、渡辺はま子、川田晴久や日舞の西崎緑、石井みどりバレー団など、その舞台装置を一手に請け負った。また、郵便切手や会社のロゴマーク、ポスターなどの公募があると片端から応募して賞金を稼いだ。それらの収入はかなりのもので、大学四か年間の学資や生活費はそれで充分あり、なお余分な金は親に送っていた。

卒業後、この課外活動で培った実技の業績が大学に認められたのか、1958年に美術工芸科の立体図案（現在のプロダクト、デザイン）担当の講師に採用された。ところが当時はデザインという言葉でさえ通用していない時代で、大学で学んだのは平面図案だけで立体図案とはどういうものなのか、それを大学教育のカリキュラムとしてどのように組み立てていけば良いのか、全く暗中模索の状態だった。それにしても、採用のときに、「君ならやれるよ」と言って下さった学科主任や図案担当の恩師、今日の私の専門を築くための勇気をどれだけ与えていただいたことか。その後、千葉大学工学部工業意匠学科での研修、ニューヨーク、プラット、インスティテュウト大学院美術、デザイン学部への留学などでデザイ

ンの研究を重ねて、大学のデザイン教育に自信がついてきた。琉球大学に1996年まで38年間在職し、現在は沖縄県立芸術大学でデザイン論を担当している。

ふり返ってみると、1950年から1996年までの46年間、研修や留学以外は琉球大学のキャンバスから外に出たことがない。そして大学の変遷を内側からつぶさに見てきた。また、自分の専門のデザイン（企画・設計）の立場で多くの「モノづくり」にかかわってきたが、その実現にあたっては多くの方がたのご協力があったればこそ可能にしたものと思っている。中には同窓会の資金援助で寄贈したものもあるし、同窓生その他のボランティアの援助によるものもあるのでお名前を記録し、感謝の意を表したい。

1980年５月22日に行われた開学30周年式典は参加者に大きな感銘を与えたが、そのときの新聞報道によると、「式典は高らかなファンファーレで始まり、開学当初、時を告げたガスボンベの鐘が鳴り渡り、琉大祝典序曲の演奏で始まった。……」とある。このファンファーレ、祝典序曲および式典舞踊曲の作曲は中村透教授、管弦楽団の指揮は糸数武博教授、式典舞踊の振付は金城光子教授、舞台美術は神山泰治教授がそれぞれ担当した。この式典で琉球大学学章が制定され除幕が行われたが、そのリ・デザインをするにあたって、同窓生の宮良薫氏のCG技術協力をいただいた。そのほか、学章規則、記念誌の発行、記念式典・祝賀会の計画など、全て仲宗根健三課長、仲門勇市補査を中心に庶務課で行われていたが、殆んど徹夜の作業であった教官と事務官それに同窓生と学生が一体となって成功させた大学のこのようなイベントは他に無い。

移転にともない西原新キャンパスの環境デザインにあたって、まず首里キャンパスの高木はできるだけ全部西原へ移植することを計画し、それによって現在の「首里の杜」を造成した。その殆どは1960年代、沖縄の各市町村から琉球大学に寄贈された樹木である。教育学部南玄関前広場に円形ベンチをつくり、その中心にシンボルになる木を探してきて植えたが、それは首里キャンパスで30年間育ってきたモモタマナ（クワーディーサー）で、枝ぶりも大変美しい。できるだけ枝を切らずに運ぶことになり、車の少ない深夜、新垣正順学部事務長が苦労して運んできたものである（1981年）。私はそれを「アラカチ・クワーディーサー」と呼んでいるが、琉球大学50数年の歴史を現在まで見守っている記念木である。直線的な配置のキャンパスの環境設計の中で、図書館前広場は遊びの空間として、曲線で設計することにした。法文ビル屋上から眺めながらビーナスの胸をイメージした曲線で築山を区画し、ビーナス広場とした（1984年）。玄関正面には、湯川秀樹博士が揮毫された「学而不厭」の書を1.3倍に拡大し輝石安山岩に彫刻して取りつけ、図書館のシンボルにした（1982年、石嶺実彦氏彫刻、設置）。

同窓会の資金援助で制作し大学に寄贈されたものには、「首里の杜」の碑（1989年、東江順子沖展会員揮毫）、首里城内に「琉球大学跡」の碑、沖縄県立那覇病院内に「琉球大学医学部跡」の碑、（両方とも1994年、砂川恵伸学長揮毫）。大学の「首里の杜」内に創立45周年記念彫刻「なみ」（1995年、企画・設計、安次富長昭教授、彫刻制作、丸山映教授）がある。そのほか、「琉球大学」正表札（1983

年、宮城健学長揮毫)、医学部の献体「慰霊」の碑（同年、大鶴正満医学部長揮毫)、「教育学部」正、副表札（1982年、屋我嗣幸沖展会員揮毫）があるが、それらの石材は全て久米島仲里村（現、久米島町）の島尻から産出した輝石安山岩で、沖縄県産最高の石材である。1971年、当時の平良盛忠村長から寄贈していただいたものである。

デザインという「モノづくり」においては人、物、目的の相互関連を考えながらその調和を考えていかなければならないが、その中で特に人と人との協力が如何に大切であることか。新キャンパスでのデザインで特に忘れることのできない方がたは前述のほかに、坂本好夫事務局長、稲冨松雄経理部長、和田昭三施設部長等の特別な配慮があったからこそ、本館ロビーの陶壁画「真南風（まふぇー）」（1981年）の制作や各学部の絵画作品購入などを含めて、大学全体の美的環境デザインを実現しえたものと感謝している。

1950年琉球大学開学のとき入学して、机、腰掛などの制作から始まり一年次のとき、「琉球大学開学記念切手」や「琉球大学シンボル、マーク」（現学章）をデザインした。2000年発行の琉球大学50年史、写真集１６頁～17頁の切手説明文は誤りで、正しくは、「（前略）琉球大学開校記念切手図案募集により、１等に入賞した本学の安次富長昭教授（当時本学１年次学生）の図案をもとに、大城晧也氏が補作して発行されたものである。」（平成5年１月、琉球大学学報295号）これをきっかけに、母校のデザイン担当教授として在職してきた。琉球大学の歴史と共に歩んできた私の50年は、正に無から有を生じてきたデザインの歴史であった。それはまた、母校が未来永劫に発展することをうたった「雲よ湧け　千原の空」（1988年制定、同窓会より母校へ贈呈）の心と同じ思いである。

琉球大学最初の奨学金　―久場崎米人学校から２名の琉大奨学生に―
写真左から、リリーB・モリス教諭、エレン・クラークソン生徒代表、胡屋朝賞琉大大学長、ウイリアム・エリオット米人学校長、家政学部４年次学生久田都代子（現新垣都代子琉大名誉教授)、教育学部４年次学生安次富長昭（現琉大名誉教授）　（1954年１月15日、THE RYUKYU KOHO）

思い出の呟(つぶや)き

琉球大学同窓会顧問
大　城　盛　三
２期　語学部英文学科

７０歳(ナナジュウ)の坂登(ヒラヌブ)で後方(アトカタ)を見りば　登(ヌブ)て来(チャ)る坂(ヒラ)やまぐいひぐい　の例えのように、敗戦後の窮乏生活を言い表わすことができない程紆余曲折の道程だった。

そのようなコンニャク状態の世相で、首里キャンパスの露天で、沖縄有史以来初めての大学入学式が挙行された。生徒562人、44人の教職員での門出でしたから巷で噂に花が咲いた。かって敵国の米軍が初めて大学を創設との美言信を傷つける噂があった、今もある。

大学設立目的の欄をめくると「…本学はまた軍事占領の目的に沿うて民主主義国家の自由即ち、言論・集会、訴願、宗教及び出版の自由を増進するために…」とある。実に、無類な目的をもつ大学であった証の片鱗を文字の隙間から垣間見ることができる。

１、学生による通訳の仲立ちで授業だった

ミシンガン州立大から派遣された教授が増えたが、受け皿たる学生の能力、年齢、学歴等差が大きかった。従って米人教師の話す英語の音は聞けたが、意味がさっぱり理解できなかった。歌は聞けるが詩の意味がわからなかったようなものでした。ついに優秀な学生が通訳をしての授業となった。理解できたので、やる気が湧き、志あれば事成ると知ったが楽しき事短く　苦しき事多かりきの日々でした。

一方、軍国教育者だった教授が、デューイの原理を説くのに逆らって質問攻めと化し、魑魅魍魎(ちみもうりょう)達にエクセントリックの教授は困らされていた。

２、留学生の予備校に成り下った大学

琉大で間に合わせ勉強をし、本土や米国留学を目指す学生が増えていた。前記通訳した学生がその象徴たるものでした。さらに琉大側は休講までして、教室を受験場に提供し予備校をして後押しをしていた。事実は小説より奇なりで、大学が他大学の予備校だったメタホーが今も消えていない。

３、勤労学生が急増

軍令で募集要項が配布された。内容は「衣食住一切支給する」に花開けば喋来たる　喋来たれば花開く　の自然の摂理で受験生が殺到した。合格者は「鳥なき里のコウモリ」のように振る舞ったのもしばし。いきなり授業料も納入させる始末。狼狽して勤労学生が激増した。私は米軍高官のハウスボーイになった。時流に溺れかけようとした折に救われた。その時点から集中的に英語を学んだ。思うに、努力は実力を生み、実力は自信を養い、自信は勉強の喜びが倍加することを知覚した気が

する。ある社長の回顧録に「人生は勝負の連続、企業も又同じ。知識とか見識は学校で学べるが、胆(たん)識はそうはいかない。これがないと勝てない。哲学をもち実践した人が胆識を備えた人だ」に触発されたものです。

4、胆識を下敷きにして同窓会長を務める

ものの本に、人を昆虫に例えて三分類している。①クモみたいな人（クモは巣を作るまではよく働くが、その後は獲物のくるのを待つ、受身だけの生き方）②蟻みたいな人（よく働く割に、餓死する率が高い。効率の悪い生き方）③蜜蜂みたいな人（限定期間内に花は咲く、その花から密を集め豊潤な生活をし、余分の密を人間に割愛し健康寿命に役だてて、人間に喜ばれて、人の生き方のモデルだと、もて栄えされている。小生は蜜蜂に因んで同窓会長の職を果たした積りです。そうするために共通理解、認識を深めるためにパブリシテーを重視した。沖縄タイムス社（比嘉敬社長）の協力で“琉大風土記”を五ヶ月間も連載し、314頁の本にまとめた。次に同窓会会報、又吉慶次、平良善一が事務局長の任につき、予算健全化したのは特筆に値する。東江康治学長の協力で新入生から同窓会費を徴収し、奨学基金を創設、砂川恵伸学長は文部省を押し切って奄美分校生を琉大卒と認定、琉大の歌の詩と曲、植樹、記念石碑建立等は会員と大学の知と汗の結晶です。会長在任中、天の時、地の利、人の和が揃えば大抵の事は成就できるとの貴重な体験をさせてもらったことに感謝し、筆をおく。

同窓会と同窓会員名簿について

知　念　績　一
３期　理学部生物学科

この度、琉球大学同窓会結成五十周年記念誌を発刊する運びとなった事に対し、同窓会員の一人として、又一時期役員として同窓会発展のために微力ながらも協力して来た者とし大へん嬉しく思うと同時に記念誌の発刊に御苦労下さった役員の方々に深甚なる敬意を表するものであります。

1950年（昭和25年）琉球大学が破壊し尽された首里城跡に開学してから幾多の変遷を経て、現在の千原のキャンパスに国立大学として名実共にその偉容を誇るまでに成長した吾が母校を眺めるにつけ、遠く過ぎしその昔、あの首里キャンパスで、貧しくそして苦しい中で青春を謳歌（おうか）した学生時代が今は淡いベールの奥で懐かしい思い出となって甦って参ります。そして早くも1953年（昭和28年）には第１回卒業生として僅か26名、修了生74名をパイオニアとして社会に送り出しております。しかし、当時は、社会的に未だ評価を受けていない琉大卒として、半ば好奇の目で迎えられたが、卒業生のパイオニアとしての自覚と若さと活躍振りが次第に評価を受け、２期生以降の卒業生も次々と戦後の人材不足の沖縄社会の回復に大きな期待をもって迎えられるようになりました。特に沖縄戦で人材を消耗しつくした上に戦後の教育改革による学校数の増加によって生じた教員の絶対数の不足を殆んど琉球大学の卒業生で補い、戦後沖縄の教育の復興に尽した功績は非常に大きいものがあり、その基礎の上に立って現在の沖縄があると言っても過言ではないと思います。そして、政財界、法曹界、教育界等々も、すべての面で琉大の同窓生をぬきにしては語り得ないと言うのが今の沖縄ではないでしょうか、その意味において、戦後琉球大学が沖縄の地域社会に果した役割が如何に大きかったかを明記する必要があると同時に同窓生としても大きな誇りを持って然るべきであります。今では沖縄県内だけでなく県外、国外で重要なポストで活躍している方々も多いことは周知の通りであります。

一方社会に出ると、どうしても学生時代の友が懐かしくなるもの、又お互の近況が知りたくなるのも人の常であります。そこへ、誰彼となく同窓会結成の話に有志が集まり親睦を深めながらも次々と卒業してくる後輩達を暖かく迎え入れ、将来、大きな組織になって社会的にも大きな力になるであろう夢を見ながら、同窓会結成の意志を確認し合い、1954年（昭和29年）12月に初代会長に和気政雄氏を選任して琉球大学同窓会が誕生しました。その後、年々卒業生が増えるにつれて、同窓生の現況を把握するために名簿作成の必要性に迫られ、1973年（昭和48年）第一版が製本

されています。次いで1966年（昭和61年）にその改訂版が出版されていますが、その時すでに卒業生の数は25,000名を越す大所帯となっており、それだけの資料を集録するのに964ページにも及ぶ膨大な名簿となってしまいました。作成に当たった役員の方々の苦労たるや並大程のものではなかったことを物語っております。しかし残念な事に当時は未だ転居や職場の移動が頻繁に行われている時代であり、住所の確認のむつかしさはもとより、確認できたものもその後の移転が多く、数年後には折角製本された名簿も空欄と変更が多すぎて殆んど活用出来ない状態になり、又その後の同窓生の大へんな増加もあり、役員会等では盛んに名簿改定の必要性が論じられるようになりました。しかし、そこまで増加した同窓生の動態を調査整理するための膨大な仕事量を考えると簡単に手をつけることにはためらいがあり、その必要性は感じながらも10年以上もの時が流れてしまいました。折しも、平成12年（西暦2000年）が琉球大学開学50周年の年にあたり、大学当局では、この節目を6年後に控えた平成６年９月に記念事業企画委員会を発足させ、大学当局と琉球大学後援財団と同窓会が三位一体となって、記念事業を推進していくことになりました。同窓会としてもすすんで協力すると同時に同窓会自体としても記念事業の一つとして長年の課題であった同窓会員名簿の改定を一からやり直すつもりで平成８年７月に「会員名簿作成委員会」を立ち上げ、私がその委員長の責務を負うことになりました。最初は毎月一回の割で委員会を開きましたが、主に方法論に多くの時間を削いてしまい、結論を出すのに難渋しているところへ県外の名簿印刷業社からの請負申し込みがありはしたが、協議の決果、業者に依頼することによって、個人情報の漏洩問題等が憂慮され、結局同窓会自体で作成することが望ましいと云う結論に達し、それを推進して行くために新しく６期生の友利徹男氏にお願いして名簿作成の専任として事務局に常勤して貰うことにしました。それで一応態勢が整い「琉球大学同窓会名簿作成要領」が出来上り、後はその要領に従って作業を進めることにしました。紙面の都合で実施要領の内容は割愛しますが、ここで特筆すべきことは、専任の仕事を受託した友利氏の献身的な協力なしでは名簿の完成は有り得なかった事を加筆して、氏に対して心から感謝の意を表したいと思います。

資料の収集は足で稼ぐことが一番効果的ということで同窓会員が最も集中している学校関係を優先し、その中でもまず本島内の全高等学校を小生と平良善一氏と友利氏の３名で直接訪問して協力をお願いし、又小中学校関係は友寄事務局長も加えて地区教育委員会を訪ねたり、校長会の会場等を訪ねる等、本島くまなく協力をお願いして廻りました。離島や県外、支部、企業や官公庁等も文書や直接訪問により協力を依頼したが、何れも、同窓の方々が重要なポストにおられ、喜んで承諾してくれたことには琉大同窓会の力強さを感じました。勿論大学当局や学部学課の同窓会にも協力を申し入れ、資料の提供を受けました。しかし、収集した膨大な資料は、卒業期、住所、学部学課等が絡み合い、それを整理編成するには目が眩む程の仕事量と煩雑さを覚悟の上で友利氏が精力的に取り組んでくれたお陰で、何とか編さんのめやすがつきましたので、最後のプログラムの開発やデータの入

力等は特別なコンピュータ技術を要するので業者に依頼し、いよいよ最終段階に到達することができました。しかし、今度の名簿作成作業は個人情報関係のきびしい現状を踏まえて、印刷製本に廻すことはぜず、コンピュータに入力保存し個人情報の漏洩に充分注意しながら必要に応じて同窓会の運営、同窓会員の便宜に供することとして足掛け五ヵ年の作業に一応の区切りをつけることにし平成13年６月７日の最終委員会をもって散会することになりました。紆余曲折をしながらも初期の目的を果たすことが出来ました事に対し、多大な協力をして下さった各位に、琉球大学同窓会員名簿作成委員会一同に代って感謝とお礼を申し上げますと同時に琉球大学並びに琉球大学同窓会の今後益々の御発展をお祈りいたします。

最後にこの紙面に関係のある方々や団体事柄等に充分意を尽せなかったことをおわびして筆を置きます。

二つのキャンパスの思い出

友　寄　賢　吉
４期　教育学部美術工芸科

私は、琉球大学開学２年後の1952年に地元の首里高校から受験、入学し、1956年3月第4期生として卒業、同年4月教師として教職に就き、1994年（平成6年）に教職歴38年で、那覇中学校の校長を最後に定年退職した。退職を間近にした3月の或る日、琉大美術科の先輩の安次富長昭教授（現琉大名誉教授）から学校に電話があり、用件は、「君は首里に住んでいて西原キヤンパスにも近いし退職したら同窓会の事務局長にこないか」とのお誘いの電話であった。強い要請ともとれたので、承諾し、６月の総会後の７月から正式に事務局長に就任した。その後５年間西原キャンパス内の事務局に通学ならぬ通勤することになる。そのような経緯からして、私と琉大（同窓会）との関係は、4年間の首里キャンパスでの学生時代と、5年間の西原キンパスでの同窓会事務局時代の二つに分けることができる。そこで、二つの時代の思い出の一端を書くことにする。先ず、学生時代について、私は、小学校から大学まで、自宅から通学していたので、寮生活の経験が全くなく、当時寮生活をしいる友人たちにある種の興味（あこがれ）を持っていた。その一つに寮の食事（飯（めし））を食べたくて友人の食券を幾度かもらい寮の食堂へと行った。そのかわり、彼らを家に案内して家の食事をたらふく食べてもらった。彼らにとっては、質量ともあまりよくない寮の飯（めし）だったのか、喜んで応じてくれた。その一人がデザイン界の第一人者である美術科一期下の岸本一夫氏である。今でも私にとっては、寮の飯はなつかしくおいしかったように思う。また、当時の美術科には、芸達者が多くいて、学内では毎年恒例行事として、各学部、学科対抗の芸能コンクール大会があり、美術科は毎年優勝の常連で、その賞金で、我々無芸者もその恩恵にあづかって那覇の居酒屋へ行くのが楽しみであった。当時の猛者達も今は70歳を過ぎ、幾人かは他界している。美術科は役職柄、当時、沖縄に興行に来た有名な芸能人や歌手の舞台装置を手伝ったり、宣伝ポスターを作成したりとアルバイトによる副収入があり、他学科の友人たちがうらやましがっていた。特に印象に残っている舞台は、日本舞踊家の西崎みどりや歌手の江利チエミの舞台姿であった。一方、学内活動としては、演劇クラブに属し、舞台美術で協力した。時には、舞台監督として、演出者や演技陣をバックアップし、数々の名作を上演した。思い出に残る作品としては、「禮服」で、中今信教授指導、阿波根道子演出、友寄賢吉舞台監督がある。夏休みを利用して地方公演もした。当時の首里劇場や糸満劇場、コザ市の室川劇場等で公演して好評を受けた。地方公演中の宿泊は、その劇場で、広い舞台に一列になって大幕をおろして、それをみんなでかぶって寝ていた。〔写真〕は、当時のメンバーで、立ちけいこを終えて、一休みしているところ、その中に現副会長の玉城忠さんと私の姿もある。美術科では、「人体デッサン」の授業で、女のモデルを描いていて、悪友たちは、なんとかその教室に入れてもらえないかと嘆願する者もいた

が、そこには学長だって入れないのだと断った事もあった。その他、記憶に残るかわった事件としては、志喜屋記念図書館の火災の時、その状況をラジオで実況生放送した当時のアナウンサーの放送の語り口が、まるで、スポーツの実況生放送ではないかと、後日批判された事があった。

次は、西原キャンパスについて書くことにする。ここでは、首里キャンパスでの青春時代と違い、退職後の60代の霜ふりの頭髪が目立つ時代で、しかも、事務局長としての重荷を背負っての毎日である。事務局といっても独自の部屋はなく、大学の事務局棟のビルの一階にある一室で、正式には、「記者クラブ」専用の部屋である。そこは、報道記者が常時詰めているわけではないので、大学当局のご好意で「共用」させてもらっていた。時として、国の監査があったり、琉大にかかわる事件や、大学の式典等がある日は、急きょ「同窓会事務局」の看板を取りはずし、「記者クラブ」の看板を取り付けて、そこから出て行き、その期間が終ると、また、そこに戻るといったまさに「やどかり」の身である。部屋の中には、記者専用の机と電話、書類受棚等があり、それも共用させてもらっていた。別に同窓会独自の備品としては、大学事務局が廃棄処分した机、椅子、ソファー等をもらい受けて使用して室内の事務環境を整備し、本来の同窓会の仕事をした。当時の年間事業の柱は、〇組織の拡大・強化、〇同窓会報の編集、発行、発送、〇入会金・終身会費の納入、協力、〇同窓会員名簿の整備、〇学生課外活動援助、〇入学生、卒業生への記念品の贈呈等で、特にその中でも力を入れたのは、会員の唯一の情報誌「会報」の発行、会活動の唯一の資金源である「入会金」「終身会費」の徴収、会員獲得、組織の拡大、強化につながる「会員名簿の整備」である。特にこれまで不備だった同窓会員名簿の整備には、その特命を受けて作成事務総括者として就任した友利徹男さんの４年間かけて完成したコンピュータ入力の功績は大きい。今後は、これを駆使して、同窓会活動の諸課題に活用してほしい。次に、私の事務局長在任５年間に大学当局や学生に支援した主なものとしては、〇開学４５周年記念事業協力「彫刻：なみ」の贈呈、〇短期大学部閉学記念碑資金支援、〇八重山芸能研究会（東京、ハワイ）公演支援、〇国家公務員一種受験講座費支援（３か年)、その他がある。また、支部支援活動の一環として、学長や会長のお供として、関東支部、関西支部、奄美大島支部を訪問して交流を深めた事も思い出として残っている。

今日では、琉大開学50周年「記念会館」の一階に立派な独自の部屋、かっての「やどかり」でない同窓会事務局が設置された事は喜ばしい。今後は、そこを拠点として、琉大同窓会活動がより発展的に永続することを創立50周年に当り祈念いたします。

琉球大学演劇部のスタッフキャストのメンバー
劇「禮服」の練習　休みの一時
懐かしのメンバーだが、３人は故人となった。
1955年11月17日　琉大講堂にて

在学生への支援　～「職業講話」の試み

琉球大学同窓会副会長
津　留　健　二
4期　社会科学部政治学及法学科

母校琉球大学は、国立大学法人としてスタートして２年目に入り、新しい特色ある大学として着実に発展している。

琉球大学同窓会も50年の歴史を重ね、凡そ６万余の会員を擁する規模に拡大し、創立50周年を迎えている。昨年は、記念式典をはじめ記念講演会、芸能祭など記念行事を盛大に挙行することができた。

琉球大学同窓会の目的は、「会員相互の親睦を図り母校の発展に寄与する」ことである。この目的を達成するため、これまで、組織の強化を図り、諸々の事業を展開してきたが、その中の一つに平成１５年度から実施している在学生の活動を支援する事業としての「職業講話」がある。

この「職業講話」は、卒業時の就職が厳しい状況の中、学生が目指す職業に就くことができるよう情報を提供し、支援するために行っているものである。毎月１回の講座は、琉球大学就職支援センターとタイアップして、大学50周年記念館で開設しており、受講料は無料である。講師は原則として県内外で活躍している同窓会会員がボランティアで担当している。

内容としては、これまでに「職業と人生」「放送界への道」「公認会計士が見た時代認識と職業観」「パイロットへの道」「教職への道」「接遇の実践的対応」「企業が求める人材」「SARS研究」「EM研究」「法科大学院への誘い」「公務員への道」など多岐にわたっている。

学生への周知徹底は、大学の就職支援センターと連携して、各学部長との面談やチラシの配布、学内への立て看板の設置、大学のHPでの広報などで行っている。平成１７年度前期は、教員採用試験を受験する学生に絞った内容で実施し、100人近くの応募者があり盛況であった。

文部科学、厚生労働両省の調査によると平成17年２月１日現在での平成17年度卒業予定者の就職内定率は全国平均で82.6％。琉球大学のそれは、74.5%（3月末現在）であり、全国平均を下回っている状況であった。

琉球大学では、学生の就職問題に対処するために「全学的な立場から学生の就職を支援し推進すること」を目的に平成14年度、就職支援センターを設置し、就職率の改善に取り組んでいる。同窓会の「職業講話」についても支援情報を出し、連携を図りながら事業の成功に向けて努力してもらっている。

若者の就職をめぐる状況は、近年の経済状況や産業構造の変化等を反映して厳しいものがある。最近、文部科学省は、キャリア教育の推進を強調している。若者の職業観、勤労観の希薄化など職業に対する意識の持ち方の

問題やフリーター、ニートの増加の問題などへの根本的な対処策が求められているからであろう。さらに、いわゆる団塊の世代の大量退職の始まりや大学志願者数と大学入学定員枠との問題等が「2007年問題」として取り上げられている。

厳しい就職状況のもとで、自らの進路を決定し、その実現に向けて努力することは、学生個々人の重要な課題であるが、学生が職業観を確立し、適切な職業選択をすることを援助し、指導することは欠かすことのできない大切な活動である。

同窓会としては、この「職業講話」が、学生の自己理解を深め、専門性を活かした立派な人材として社会に巣立つことへの一助になればと考え実施している。実施にあたっては、いろいろな課題もあるので、学生のニーズを捉えながら、同窓会の力を結集し、大学と共により充実した支援策にしていきたいものである。

教員採用試験対策講座「職業講話」～開校式で学生に語る津留健二副会長～
場所：50周年記念館　　日時：平成17年４月20日

就職支援「職業講話」面接の受け方を指導する　西大八重子副会長
場所：50周年記念館

琉球大学同窓会への関わり14年を顧みて

宜　保　美恵子
５期　家政学部家政学科

琉球大学同窓会も昭和29年に結成されて以来50年の節目を迎え、会員数も6万2千人余となった。現在、同窓会は琉球大学開学50周年記念会館の中に事務局をかまえ組織も強化された。現在、常勤の事務局長として宮城武久氏、書記として與那城政子さんが同窓会の発展のために献身的に尽力されている。しかし、ここまで来るのに長い紆余曲折があった。

同窓会は、西原町の現千原キャンパスへ移転するまでの30年間は、開学10・20周年の開学記念事業等への募金協力はあったものの同窓会活動はほとんどなく、千原キャンパスへ移転してから本格的な活動が始まった。同窓会が結成された昭和29年から昭和59年までの首里キャンパス時代の30年間は同窓会活動の停滞期が続いた。それは、当時の同窓生の方々が、それぞれの分野で現役で働き盛りの年代であり同窓会活動に当てる時間的なゆとりがなかったのではないかと思われる。千原キャンパスへの移転を機に同窓会活動が始まったのは、新キャンパス、首里キャンパスの伝統を引きつぎ（特に首里キャンパスでの卒業生が）かっての学び舎を偲ぶことのできる環境づくりをしたいとの思いが強かった。又同窓生の中にも停年を迎える方々が出てきて、同窓会活動に関われるようになったことも活性化の一つの要因ではないかと思う。ちなみに、大学としての移転完了は、昭和59年の医学部附属病院の移転を以って完了しているが、首里キャンパスからは昭和57年私が所属していた教育学部の移転をもって完了している。

私が、同窓会活動に関わるようになったのは昭和63年7月～平成2年6月までの2年間は評議員として参加したが、当時は女性が私一人で淋しい思いをしたことが思い出される。引き続き平成2年7月から平成14年6月までの12年間は副会長として、都合14年間であった。昭和63年～平成2年までは、同窓会活動の基礎固めの時期でもあったので、その間の様子をのべることにする。

１．昭和63年度の事業

1)「琉球大学の歌」制定援助事業

新しく千原キャンパスに移転したのを記念して「雲よ湧け　千原の空に」大城立裕氏作詞、与儀達則氏作曲が完成し、その制定費を援助。

2)「同窓会会報の発行」

平成元年3月に創刊号が発行され各支部の状況や卒業生の活躍、随想などが掲載された同窓会の活動が目に見える形で伝わるようになった。

3)「首里の杜」碑の建立

母校を偲ぶものが欲しいということで、

首里キャンパスの赤瓦屋根を模した記念碑が建立された。
これらの事業実施のためには、先立つ資金が必要であるが、当時の同窓会の資金源は年会費千円と募金であるがその徴集もままならない状況であった。そこで、
昭和60年から始まった同窓会事業募金（1口2千円）の徴集を継続することになった。
評議員を１０の募金班に分け職場訪問をすることになった。私は同じく評議員で高校・琉大同期の田場盛雄さん（当時、与勝中学校長）と組んで出身地の中部地区の小・中・高校を訪問した。どの学校でも多勢の琉大卒がいて募金の趣旨に賛同して下さり募金徴集の責任者になって協力して下さった。こうして集まった募金で「琉大の歌」制定費を賄うことができた。しかし、財政難は解消されずこれを打開することが急務となった。

2．終身会費制の実施

平成元年度総会において、これまでの「同窓会費年額千円」を改正し、「終身会費1万円」とすることが承認された。新入生に対しては入学時に同窓会入会金として1万円を徴集し、卒業生に対しては開学40周年記念事業募金の終る平成2年以降に行うことが決まった。この終身会費制の実施によって財政的にも安定し、各事業の推進にも大いに役立った。この時期に多くの事業が実施された。主なものを挙げると、「同窓会会報の発行」在学生への「課外活動援助費」の贈呈、「卒業生・新入生への記念品」贈呈、旧首里キャンパス（首里城）及び旧医学部キャンパス（現県立那覇病院）に琉球大学跡として記念の「石碑」建立、（当時の砂川恵伸学長揮毫）、千原キャンパス首里の杜に野外彫刻「波」を贈呈した。これはキャンパス内に潤いを与え、また環境整備の一環として贈られたものである。

3．開学50周年記念事業への協力

平成８年度総会において、開学50周年記念事業への協力が決まった。
この記念事業の推進と同窓会の組織の強化のためには、名簿の整備が先決だということで新たに「名簿作成委員会」立ち上げられ、委員長に知念績一副会長、名簿総括担当として友利徹男氏が就任し、会員名簿のコンピュータ入力が行われるようになった。開学50周年記念事業として提案されたものの中に同窓会館の建設があった。卒業生がいつでも訪ねて行ける場所、そこには琉大の歴史を知ることのできる写真や資料展示コーナー等の要望があった。しかし、専用の同窓会館は実現しなかったが、現在、開学50周年記念会館内に同窓会事務局ができたことは喜ばしいことである。同窓会は募金活動の一環として、ボウリング大会、ゴルフ大会、芸能祭、コンサート、お茶会等のチャリティ活動が行われた。私が関わったお茶会には、津留健二実行委員長の緻密な企画・運営と表千家、裏千家の教師の方々のご協力を得て盛大に行うことが出来た。このように各分野の同窓生がそれぞれの得意な技で記念事業への協力が出来たことは総合大学ならではと感じたものである。

こうして同窓会は、財政的基盤が固まり数々の事業に取り組んできたが、その推進力となって組織の強化のために活躍した方々を忘れてはならないと思う。私が始めて評議員になった昭和63年当時の大城盛三会長は終身会費の導入を決め、今日の同窓会の財政的な強化の基礎づくりをされた。

事務局長の又吉慶次氏は雑多な事務を一手に引き受けて飄々と仕事をこなしていらしたのが思い出される。そして現会長比嘉正幸氏は平成２年副会長に就任以来、平成6年からは同窓会長として、特に大学の法人化、法科大学院の設置に尽力された。これらの働きに対して琉球大学より名誉博士号が授与された。12年の永きに亘って同窓会長としてのご活躍に対して心からの声援を送りたい。ここに記さなかったが、多くの先輩の方々は、そこに坐って居られるだけで同窓会に風格を与え存在感のある方々であった。私もこの活動に関わって多くの出会いがあり、専門分野をこえて多くの方々と語り会えたことは大きな財産となっている。今、琉大には多くの学科同窓会があり盛会である。それは、専門分野が同じで結びつきも強いために、お互いに気心の知れた者同志ということで盛会につながると思う。同じ同窓生でも「大学」という大枠になるとなかなか足が向かないのである。今後は、学科同窓会の枠をこえて大学同窓会への意識改革をしてほしいものである。又、同窓会の活動を支える「終身会費」の納入状況はきびしい状況といわれる。役員や評議員だけでなく、多くの同窓生が、この制度がうまく機能するよう協力してほしいと願う。最後に同窓会の益々の発展を祈念致します。

琉球大学同窓会会員名簿作成に携わって

友　利　徹　男
６期　文理学部生物学科

琉球大学同窓会が昭和29年12月に発足、創立50周年を迎えることになりましたが、昭和29年は私達6期生が大学に入学した年であり、感慨深いものがあります。

私と琉球大学同窓会との直接のつながりは、平成8年11月から４ヶ年間「同窓会会員名簿作成事務総括」として携わったことです。

同窓会の会員名簿は、昭和48年４月に「学友（Ｂ５版390頁)」、昭和61年５月に「昭和61年版　琉球大学同窓会会員名簿（Ｂ５版964頁)」として発行されている。今回は、卒業生の数が膨大になること、個人情報の漏洩を防ぐ等の事情から同窓会の名簿の印刷製本はせずに、同窓会員名と住所等の情報を調査収集してコンピュータに入力し、会員からの日常的な照会、要望に即応する体制の整備を図ることにした。

琉球大学が平成12年（西暦2000年）に開学50周年を迎えることで、様々な記念事業を計画し取り組みがなされていた。同窓会でも募金活動をスムーズに行わせるために、記念事業の一つとして、「会員名簿の整備・発行」を計画することになり、会員名簿作成委員会が発足、平成８年７月23日に、知念績一同窓会副会長を委員長に第１回委員会を行った。

初年度は、琉球大学職員、各部各学科の同窓生との連携を深め情報の提供を依頼した。本島内の学校には、知念績一委員長、平良善一委員、友寄賢吉事務局長等と出来るだけ訪問し、琉球大学50周年への募金依頼並びに会員名簿の提供をお願いした。各職場とも同窓の皆さんがこころよく対応してくれスムーズに取り組むことが出来た。

支部への協力依頼は、支部総会の機会に訪問し直接お願いした。(奄美支部総会：平成９年１月25日、桂幸昭学長・石原昌弘副会長・友利徹男出席、関東支部総会：平成９年４月26日、桂幸昭学長・比嘉正幸会長・知念績一委員長・友利徹男出席、関西支部総会：平成９年７月５日、桂幸昭学長・比嘉正幸会長・友利徹男出席)。直接訪問ができない支部や職場には文書で協力依頼を行った。県職員関係は、玉城健三事務局長が精力的に行った。

コンピュータへの入力作業は、収集した資料や大学の学事報告書をもとに、平日は平均３時間、休日は朝から出勤し一日５～６時間行った。

会員名簿作成委員会は、平成８年７月23日から35回の委員会を精力的に持ち、当初の目的を達成したので平成13年６月７日に解散した。

琉球大学同窓会は、会則第５条で「琉球大学（短期大学部を含む）卒業者、修了者及び在学生によって組織する」となっている。即

ち、入学と同時に「同窓会会員」であるので、新入生の入学手続きの折、同窓会の役員が、新入生やご父母の皆さんに同窓会入会の趣旨を説明し、加入していただいた。現在は、入学金は「振込み制度」になり、新入生やご父母に同窓会の活動内容や大学当局とのかかわりを説明する機会がなく、情報収集が難しくなってきていることは大変残念でならない。

今後、市町村合併による住所の変更、情報公開条例等の関連で、会員名簿の整備作業がますます困難になると思いますので、新しい情報があり次第、その都度、同窓会事務局へご連絡お願いします。

同窓会発足創立50周年を迎え、今後、会員相互の信頼と協力を深め、琉球大学同窓会のますますの発展を祈念いたします。

琉球大学同窓会会員名簿
（左）学友　（Ｂ５版390頁：昭和48年４月発行）
（右）琉球大学同窓会会員名簿（Ｂ５版964頁：昭和61年５月発行）

わが母校への熱い思い

高　山　朝　光
６期　文理学部社会及経済学科

１．草創期への回顧

1950年、首里城跡に設立された琉球大学は、戦前戦後を通して初めて沖縄に設置された最高学府で、沖縄戦で焦土と化した沖縄の人々にとって、その期待は大きく、私たち若者にとって夢と希望を与えた大学の誕生だった。

琉大創立4年後の1954年に私は、文理学部物理学科に入学、2年次に社会及経済学科に変更、当時は、学部内での学科変更が可能な時代であった。

私達が学んだ草創期の琉大は、施設、教授陣容など本土大学との格差が、あまりに大きく、在学生の中で国費留学をめざす学生も多かったことから国費留学への予備校、さらに、米民政府布令で設置された大学で米軍政下での法的制約も多く、布令大学、と揶揄される状況にあった。1959年６月に取材で来沖した評論家の大宅壮一氏には、８ミリ大学と悪評された。

このような、状況の中でも、学問への愛と情熱に満ちた多くの教官、学生は、大学の自治と学問の自由を大きく掲げ、学問の府を築き、沖縄の復興に尽したいとの意欲に燃えていた。

その頃、1956年、私は、学生新聞部長をしていたので、新聞論説で何度か「琉大に誇りを持とう」と主張し、学生に訴えた。

当時の沖縄は、戦後の廃墟のなかから復興へとようやく立ち上がりつつある社会状況で、経済的には、農家や貧困な家庭出身の学生が多く、自宅からの送金も殆んどなく、大半の学生は、アルバイトで学資を稼ぎ生活し、中には、アルバイト賃の一部を自宅へ送金する学生もいた。

2.　土地闘争と学生処分

一方、沖縄本島では、1951年の朝鮮戦争以降、米軍による恒久基地建設の拡大、私有地の強制接収が行われ、1956年には、米軍用地料一括払い、プライス勧告への反対闘争が全琉的規模で展開されていた。

学生も学生会を中心に一丸となって中央、市町村での決起集会に積極的に参加していた。1956年7月28日に那覇高校で開催の四原則貫徹総決起大会には、約10万人が参加した。私たち学生も、夏季休暇中にもかかわらず、約500人が学生会の統括の下に女子寮前から那覇高校までデモ行進をし、大会に参加した。
戦後かってない土地闘争の盛り上がりに対し、米軍および米民政府は、土地闘争を抑圧するため、経済的打撃を狙いコザの飲食店街への米軍のオフリミッツと琉大への援助打ち切りの圧力をかけて来た。

琉大当局では、大学存亡にかかる試練に直

面し、米側への再三の対応に苦慮、その結果、結局学生側に、ヤンキーゴーホームなど反米的行動があったとして学生会長はじめ6人の除籍と１人の謹慎処分を決定した。

私は、学生新聞部長、土地問題を本土へ訴える学生代表団派遣予定の一員で、デモ行進のグループリーダーでもあったので処分を覚悟していたが、対象外となっていた。

処分撤回のため私達学生は、署名運動を展開し、大学に処分撤回の強い要請を繰り返し行ったが、認められなかった。

土地闘争に向けられていた学生の情熱は、処分撤回要請が実現できなかった悔しさなどからか、次第に学内での社交ダンス熱への高まりとなって行った。

７人の処分学生は、その後、大学側の水面下での本土大学への働きかけにより本土大学への編入学、琉大への復学となった。

1958年に卒業した私は、公務員採用の通知を受けていたが、当時の副学長仲宗根政善先生の勧めもあって学生部に就職した。仲宗根先生は、処分学生の本土大学への編入学促進にご尽力され、さらに、それらの学生支援の奨学金捻出に奔走されておられた。

私は、処分学生の一人、古我地勇学生会長の地元、羽地村へ奨学金の要請で仲宗根先生のお供をしたり、沖縄教職員会で定期的に支援奨学金を受け取り本土大学編入の学生に送金していた。処分された学生7人全員が本土の大学、琉大を卒業した。

３．琉大設立の背景

琉大学生、職員としての14年余に亘る私の琉大時代の思い出は、30年余経た今でも尚、鮮明であり、尽きることがない。

1950~1960年代の琉大は、陸上競技が強く、全琉地区大会で優勝、その折、私は役員として選手団の先頭に立って入場行進し、大きな誇りを覚えた。また、日本の戦後復興に伴い、都市地域に人口が集中し、教員不足をきたし、1965年には、大阪、神奈川から琉大に教員採用の依頼があり、私は厚生係長として積極的に対応、卒業生を送り出した。

さらに、琉大在職中にハワイ東西センター奨学生としてハワイ大学大学院へ留学の機会を得た。ハワイ滞在中に私は、多くの一世の方々にハワイ沖縄移民65年の足跡を辿るインタビューを行った。その中で、ハワイ沖縄県人は、戦後、さまざまな沖縄救援活動を実施し、その一環として沖縄厚生会では、沖縄の人材育成を重視、沖縄に大学設置の募金運動を展開した。資金のメドもついたので、代表がハワイの米軍太平洋司令部を訪ね大学設立の主旨を説明し認可を要請した。これに対し、米軍は、米側で大学設置計画のあることを初めて明らかにした。ハワイ沖縄県人がハワイで米側へ大学設立認可申請した2年後の1950年に米民政府により琉大が設置された。琉大設立の背景には、戦後の日本の農地改革に大きな役割を果たされた湧川清栄氏を中心とするハワイ沖縄県人の独自の大学設置構想があったことを、私は、ハワイでの湧川氏とのインタビューで初めて知った。

ハワイ沖縄厚生会では、沖縄での大学設置が実現出来なかったので、その基金を活用し、1948年に５人の留学生を招き、ハワイ大学大学院へ入学させた。これが契機となって、1949年に米国陸軍省の奨学資金による米国留学制度がスタート、1972年の本土復帰までに1000人余の留学生が米国で学んだ。

4.　南の星と輝け

私は、人生の中で転職に恵まれ、琉大、NHK、沖縄県庁、沖縄県信用保証協会、那覇市役所で、それぞれ重要なポストで仕事をさせていただき幸運に感謝している。

琉大では、学生、職員時代の14年を通して学生、同窓生と培った絆が、その後の職場で大きな支えとなった。一例として、沖縄県庁知事公室長時代に県議会との連携を図る一環として琉大出身議員との懇談の場を設定したところ、与野党の立場を超え10人の議員が出席し、親しく意見交換することが出来同窓生のありがたさを実感した。多いに感謝した。

琉大創立から55年、1950年の開学時には、562人の学生と44人の教職員でスタートした大学は、沖縄の苦難の歴史と共に歩み、2005年の今や、7956人の学生（大学院生を含む)、教職員1732人を有する総合大学として発展の一途をたどっている。

琉球大学が東南アジア・太平洋諸国・地域との国際交流拠点大学としての益々の学術交流展開を図ることに大きな期待を寄せている。琉大よ学問の殿堂として南の星と輝けと願う。

母校、琉球大学への限りない愛着と各分野で活躍する同窓生の一層の発展を祈る。

母校への思い

宇　垣　和　美
７期　教育学部初等教育科

私は、1959年の３月に、琉球大学の教育学部を卒業しました。

当時は、首里キャンパスで、校舎も、環境も、物資の面では、今の琉球大学のように、すばらしいものではありませんでした。けれども、教えて下さる教授と学生、学生と学生の仲間のふれ合い、一心のコミュニケーションは、とても温かく、穏やかで、安心して、勉学に励むことができました。

お昼のランチタイムも、教授の先生たちも、学生といっしょに、校内学食でとりました。ある日、T教授が、「君達は、卒業したら、学校の先生になるんだろう。音痴の生徒も、ちゃんと教えるんだぞ！」と言われた言葉を、今でも、私は、忘れることができません。

私は、琉球大学の学生である事を、大変、誇りに思い、那覇の町へ行く時も、買い物へも、どこへ行くにも、琉球大学のバッチを胸につけて、さっそうと歩いて行きました。「琉球大学、ここにあり。」まさに「黄金時代」でした。

卒業後も、私は、母校への思いを持ち続けて、母校への発展のために、「琉球大学同窓会の評議員」を引き受けました。

その琉球大学が、50周年を迎えました。

今回は、特に、形に残る建物「モニュメントの建設」が、事業の目玉として、とり上げられ、自主的なイベントとしては、「チャリティーボウリング大会」「チャリティーゴルフ大会」「チャリティーお茶会」「琉球芸能と西洋音楽の夕べ」などで、それぞれのパートごとに、まとまって、その知恵と協力体制の支えは、おみごとでした。

その時は、いつも、比嘉正幸会長さんは、うまく、かじ取りをして下さいましたし、事務局の方々や役員の皆さんの「かげの力」も、多大なものがありました。

こうして、多くの方々の母校への思いが花開いて、りっぱな「モニュメント」が、完成したのです。「やった！」皆、歓声を上げて喜びました。この50周年の「モニュメント」は「歴史的な記念館」になりますので、「琉球大学の歴史が、すっぽり修められている」事になります。

募金活動の苦労はありましたけれども、メリットも、たくさんありました。

「チャリティーお茶会」の時です。私は、当日、「受付」を担当しました。すると、その時、メンバーの一人が、「あなたたちは、お茶会の看板娘よ。」と言われて、一瞬、ドキンとしました。この年になって、「看板娘」なんて、とても、びっくりして、皆、大笑いしました。これまでの苦労が、いっぺんに吹き飛んでしまいました。母校を思う気持ちが、これらの活

動を通して、いっそう熱くなり、仲間同志の心のコミュニケーションが、ますます、豊かに、深くなっていったように思います。

戦後の焼け野原から、立ち上がり、未来に目を向けた若者たちが、琉球大学へ通い、卒業して、どんどん社会へ出て、今、各界で、沖縄を支えるまでになっています。

琉球大学で学んでいる後輩の皆さん！皆さんも、この「ぬくもり」を大切にして、卒業後は、経済、財界、政界、教育界など、いろいろな所で協力し合い、支え合って、ますます、この「琉球大学」を盛り上げ、発展させていこうでは、ありませんか。

首里キャンパス　志喜屋図書館をバックに　（1956年１月）

琉球大学開学50周年記念茶会　（1999年11月21日）

想い出の旅

琉球大学同窓会副会長
玉　城　　忠
７期　教育学部体育科

琉球大学が米国民政府の布令で開学した昭和25年（1950年）年頃は、公立学校教員の不足時代で当時私は高校を卒業して、すでに中学校の教官補（代用教員）をしていた。

だが、将来は体育教師になりたく、昭和30年（1955年）年琉大体育科に受験そして合格・入学した。　教師生活５年を経ての大学生活である、しかも妻子を里に残しての、「単身赴任」ならぬ「単身入学」だった。

教える立場から学ぶ立場に変身した私は、同級生より５歳年上のおじさん学生で、勉学よりむしろ学生会活動に興味をもった。

1956年７月28日の那覇高校で開催された、プライス勧告反対「四原則貫徹全島住民大会」に参加、学生総会の議長団、そして男子学生寮の寮長と、学生会活動に活発に参加していた。そんな私に本土旅行の機会が与えられたのは、貧乏学生３年次の時で今から50年前のことである。

琉球大学学生会の代表としての本土旅行であった。パスポートとドルを懐に、まだ自由に渡れない頃の初めての本土旅行で、琉大学生会代表という使命感と同時に、旅費は全国私学連盟待ちの恩典もさることながら、なによりも沖縄を脱出して、交流のない本土の大学を訪問出来るという期待で、胸を弾ませたのを覚えている。

旅行目的は、「学術文化交流使節団」という、極めて平和的な名称だが、実は「全国私学生自治会連盟」の招聘による、戦後の沖縄の実情を関西、関東の私立大学に訴えるための、少々政治色の濃い旅行だった。

1958年（昭和33年）９月19日に私達３人、仲宗根弘明君（琉大学生会副会長）、宮城喜久蔵君（事務局長）は泊港から那覇丸で大阪に向かった。

埠頭での見送りには、学生会の津留健二会長（後の県教育長・現琉大同窓会副会長）をはじめ多くの学友、家族、それに立法院の議員さんの顔も見えた、さらには、出港を前に那覇丸のスピーカーから、我々３人が乗船していることを再三放送していた、時代とはいえ今では考えられない出港の風景であった。

最初の訪問は大阪の近畿大学で、我々は薬学科に仮入学の許可をとり、近畿大学を拠点に大阪商大、奈良女子大、新聞社など私学連の役員と共に精力的に駆けめぐった。中でも大阪産経ホールでの沖縄問題報告会では、３人で分担して「沖縄の土地問題」「ドル切り替えの影響」「沖縄の経済と文化」について懸命に演説をしたことが懐かしい。

さらに、大阪商大学園祭の演劇の夏目漱石の「坊ちゃん」にも特別出演したり、近畿大学での学内バレーボール大会にも出場したことも楽しい想い出になった。

関東での我々は新宿に宿をとり、初めて見

る復興著しい東京で、日本大学、拓殖大学、大正大学、武蔵野工大、立正大学、相模女子大、それに新聞社などを訪れ使命を果たして、１ヶ月の旅を無事に終えた。

この旅では初めて見る大阪城、通天閣、奈良公園、京都の名所旧跡、和歌山の白浜温泉、日比谷公園、浅草仲見世、皇居など現代風にいえば素敵な観光旅行でもあった。

その頃の沖縄情勢は、「プライス勧告反対」「四原則貫徹住民大会」「那覇市長に瀬長亀次郎氏当選」その瀬長市長をムアー高等弁務官が市長の座を追放し、代わって民連の兼次佐一氏が当選。そして通貨のB円が米国ドルと交換など、沖縄の政治・経済は揺れに揺れていた過度期で、住民の生活は混沌としていた。ましてや本土への旅行など一般住民には大きな夢だった。

今では日本は経済大国になり、小中学校生でも本土旅行をするし、大型連休ともなれば海外旅行に十数万人が出掛ける時代である。

私にとっては半世紀50年前のこの旅行は、生涯忘れ得ない心に残る学生時代の思い出のひとつである。

大阪毎日新聞社にて討論会

大阪産経ホールにて沖縄問題報告会
（左２人目より　玉城、仲宗根）

立正大学校門前にて
（前列左から　玉城、仲宗根、宮城）

相模女子大にて
（右端　元琉大自治学生会長古我地君）

母校への期待　～国立大学の法人化に向けて～

當　銘　吉　雄
7期　文理学部経済学科

地方の大学は、その存亡をかけた特色づくりが、その明暗を左右する。

昨今の国内の動向に目を転ずれば、規制緩和や三位一体改革などによる国立大学の独立法人化による大学運営の環境は厳しいものの、大学運営の自治付与と、自己完結型の責任体制の導入で、大学自治の個性化と多様化が広く求められている。

少子化が急速に進展する中で、そのパイ（学生募集）の誘因・誘導策として魅力ある大学をいかように構築していくかは、県内外の社会的動向やニーズに迅速にどう対応し、如何なるサービス提供とその内容によって真価が問われる。

現存する大学においては経営資源を中・長期の展望に立脚して社会の変化に機動的に対処できるシステムの構築と組織の改廃を含めた安定的かつ建設的な人材の再配置によるシステム作りが重要だと思われます。

今年４月から開設された観光学科は地域社会のニーズに応えた措置として、高く評価されるであろう。

観光学科のカリキュラムについては、地域の観光産業に携わる関係者のニーズを汲みあげて、４年後の学卒がその分野で中堅社員として活躍できる足固めとして、柔軟性・行動力や国際性のある積極的な人材教育に重点で取り組まれることを期待するものである。

更に大学内において、構想段階の海洋生産学科、発酵化学科などの新設などは、本県が四辺を海に囲まれた海洋性地域として、海底資源の活用に着目した点は、沖縄の立地特性を生かした大学として大きく飛躍するものとして大いに期待しています。

総合大学を流通業界に例えるならば、学部（全ての品備える総合デパート）に該当し、学科（その中の各売り場ブース）とするならば、カリキュラムの変更（そのブース取り扱いの売上げ高によって商品仕入れ）の点検、棚卸による社会的ニーズと対比して、学科減（その商品仕入れの縮減）も視野にいれて、学部・学科の再編も再検証する必要がある。

その改革プロセスは地域に開かれた大学として「沖縄の自然の特定、歴史、文化の固有性などに根ざした教育研究によって特化し、地域特性と国際性を併せ持つ大学として発展することを目指す」現学長の森田猛進氏は述べておられます。

ちなみに酒類業界に長年在職した経験から、世界のビール業界で、多くのビールマイスターを輩出し開学以来、地域業界との相提携した大学を紹介します。

ビール本場はドイツとよく言われます。ドイツはその主要原料であるモルトやホップは自国で調達され、その余剰産品は海外へ輸出されております。

20世紀初頭において、各地方には「おらがビール」として3000余のビール工場が存立して、その醸造技術の移転、提供や技術者養成機関として「ミュンヘン工科大学」の存在は同

国や世界ビール業界に大きく貢献してきました。

現在ではM＆Aなどにより1000軒余のビール工場になり流通機構の発達によりＮＢブランドのビールが増えつつあります。

同大学は1823年に創立され、ビールマイスター養成大学としてスタートしたが1877年、1970年に大幅な制度改革をおこない現在に至っております。

そのため、大学内外の知恵と情報の活用は、必要である。

現在、琉大同窓生６万５千人余が輩出して、国内外で活躍しておられる方々をアドバイザリー、コミッティに参画して、社会経験を生かした各分野の意見や提言を聴取して、中・長期のグランドﾃﾞｻﾞｲﾝの大綱を構築・策定する時期に到来しているものと想われます。

大学運営の根幹は地域社会での存在感と地域密着型の連携強化と共生思想のもとにその共通理念は相通じるものがあり、今後の学部学科の開設にあたって大いに参考になるものと思う。

本学の同窓会創立50周年を契機にますますのご発展を祈念いたします。

志喜屋記念図書館（右端は戦争で残った赤木）

ミュンヘン工科大学（1985.9.8）

同窓会創立50周年記念芸術祭公演が成功裡に終了

琉球大学同窓会副会長
赤　嶺　健　治
8期　文理学部英文学科

このたび、幸いにも、同窓会創立50周年記念誌への寄稿依頼を受けた機会に、同じく記念行事の一環として、2005年２月19日に宜野湾市民会館で開催された芸術祭「琉球芸能と西洋音楽の夕べ」の企画実施に係わった一人として、公演成功の経緯を記して、改めて実行委員、出演者、その他協力者の皆様への敬意と謝意を表したい。

創立50周年記念行事計画の発端は、2002年11月の同窓会評議員会で、「同窓会創立50周年記念行事」実施計画案について、趣旨、推進組織等に関する事務局案の説明を受け、協議したことである。翌2003年6月に、学部・学科同窓会役員や学内在職同窓会員との集いで、上記事業計画案の説明と協力要請が行われた。同年同月に第1回同窓会創立50周年記念行事委員会が開催され、総務部会、祝賀行事部会、芸術祭等部会、記念誌部会が設置され、本格的取組が始まった。同年12月に開催された第2回芸術祭等部会で、同窓会副会長の一人である私が部会長（担当副会長）に選任された。

翌2004年５月、第３回部会で、「琉球芸能と西洋音楽の夕べ」と「美術工芸展」の開催が決定され、それぞれ実行委員会が設置された。「美術工芸展」については、稲嶺成祚委員長を中心に、翁長自修氏、岸本一夫氏らが、早々に会場予約をし、着々と準備を進めておられたが、同窓会の財政難のため、開催断念のやむなきに到ったことは、誠に残念であった。この場を借りて、「美術工芸展」関係者各位の熱意と協力に対し、深甚なる敬意と謝意を表するとともに、御要望に添えなかったことをお詫びしたい。

「芸術祭」の方は、2004年５月の第１回実行委員会で、委員長に前川朝文氏、琉球芸能部門長に知花清秀氏、西洋音楽部門長に照屋寛八氏をそれぞれ選任し、芸能界を代表する総勢21人から成る実行委員会の陣容を整え、公演に向けた準備をスタートさせた（別掲の芸術祭プログラム参照）。殆どの実行委員が、2000年の４月と11月に琉球大学開学50周年記念事業として開催された「西洋音楽祭」や「琉球芸能祭」で中心的役割を演じた方々であったことが、今回の芸術祭の能率的企画運営と公演成功の土台となった。その後数回の全体委員会、部門別委員会を経て、プログラム等を決定し、2004年11月の芸術祭等部会と同窓会役員会の合同会議で、プログラムと実施細目を最終決定し、2005年１月発行の『琉球大学同窓会会報』第27号で公表した。以後プログラムに多少の修正変更を加え、いよいよ2005年2月19日の公演日を迎えたのである。

公演内容と出演者等の詳細は、別掲のプログラムを参照されたい。第Ⅰ部の西洋音楽、第Ⅱ部の琉球芸能ともに、その分野の第一級

指導者から若手後継者まで、総勢200余名の芸術家が会派・流派を超えて一堂に会する前代未聞の超豪華顔合わせ公演が実現した。琉球芸能では、組踊、舞踊、三線、琴、笛、胡弓、太鼓など国・県指定無形文化財の技能保持者が多数出演された。特に、全員が琉大同窓会制作のＴシャツを着用しての開幕斉奏・合唱は圧巻で、感動の極みであった。ただ一つ残念であったのは、会場一杯の観客に観て頂きたかった、この最高級の公演で、空席があったことである。悪天候も災いしたが、観客動員等広報活動については、今後の反省材料としたい。

最後に、実行委員、出演者、森田学長はじめ大学関係者、会場担当者、同窓会役員および事務局スタッフ、その他協力者の絶大なるご支援に対し、衷心よりお礼を申し上げ、また皆様と共に芸術祭公演の成功を喜びたい。乾杯。

琉球大学同窓会創立50周年記念芸術祭公演スナップ

母校、琉球大学への熱い思い

與　儀　憲　徳
８期　文理学部英文学科

琉球大学同窓会は、開学から４年後の1954年12月４日に発足され、以来色々な活動を通して大学の発展のために支援・協力してきた。いまや同窓生も４万余名を擁し、昨年12月に創立50周年を迎え、その記念式典及び祝賀会は、年明けて今年２月12日に挙行された。この場を借りて、心よりお祝いを申し上げたい。

この創立50周年の節目に、せっかく与えられた機会なので、紙面の許す範囲内で母校琉球大学に対する熱い思いを綴ることにした。琉球大学には、学生として４か年間お世話になり、米国留学を終えて帰国後、1965年４月に英語の教官として採用され、以来2002年３月に退官するまでの37か年間、充実した教育研究生活を送ることができた

在職中の最後の約４か年間、法文学部長として、学部運営、大学行政に関わる機会が与えられた。その間、人文社会科学系博士課程の設置に向けて、「琉球大学国際地域社会文化研究科博士前期・後期課程(仮称)」設置準備委員会を発足させ、その委員長には、のちに私の後任学部長となった伊礼恒孝教授を充てた。この研究科の設置目的は、沖縄のもつ地域特性を生かした地方からの国際交流及び国際協力・貢献を果たすこと及び21世紀の知的資産の蓄積に寄与するために、国際社会を教育研究対象とし、積極的に外国人留学生を受け入れるなどして国内外の有為な人材を育成することであった。このような特色ある研究科の設置をめざしてアジア・太平洋地域における学術交流ネットワークを構築するために、シドニー大学、メルボルン大学、モナシュ大学、タマサート大学、チュラロンコン大学、ハワイ大学等を訪問し、文部省（現文部科学省）とも幾度となく折衝しながら鋭意検討してきたが、諸般の事情で、この計画は見送られ、既存の人文社会科学研究科修士課程を改革することになった。

その改革案の中には、国際的な相互依存度が更に増すと思われる21世紀を見越した人材育成に向けて、目玉として講義はすべて英語で行い、商法や経営学、国際関係論、情報科学、言語科学、異文化コミュニケーション論、欧米文化論等を専門とする教官で構成する「グローバル・コミュニケーション領域」が含まれていた。近年、情報通信技術や交通輸送手段等の発展に伴い、文明・文化のグローバリゼーションが急速に進み地球的規模の異文化交流が社会の様々な領域にまで深化するにつれて、社会を取り巻く環境も複雑化し、価値観も多様化してきた。それを受けて、この領域では、フィールドワークやインターンシップ制度等も積極的に推進し、より実践的な教育を行い、高度な専門的知識に加えて、異文化理解能力、外国語運用能力、情報処理能力、異文化間交渉・説得能力、および企画・立案・管

理･運営能力等のいわゆる国境の枠を越える多様な能力、つまりトランスナショナル・コンピタンス（Transnational Competence）を兼ね備えた人材を養成するための教育プログラムを提供することを目的としていた。しかし、その設置は文部省を説得するまでに至らず、今後の人材育成の課題として残すことになった。

ところでいま学内では、人文社会科学系博士課程の設置に向けて準備が進められているようだが、大学像として地域特性と国際性を併せ持つ琉球大学に、「琉球アジア研究」、「島嶼研究」、「移民研究」、「アメリカ研究」等の国際的な教育研究拠点（知の交流拠点）としての博士課程が早急に設立されることを期待している。

また、在職中に掲げた学部の中期目標には、「島嶼研究センター」、「アメリカ研究センター」、「法科大学院（ロースクール）」等の設置や副専攻制度の確立等があり、更に大学評価センターの報告書では、「教員の教育業績の評価」や「教職センター」、「就職センター」の設置及び「語学センター」を「外国語教育研究センター」として拡充することなどについても言及した。

副専攻制度の確立は、学生の付加価値を高めるためにも、その実現は必須である。因みに、これは国立大学移管前に、すでに琉球大学にあった制度であり、アメリカの大学では、ダブル・メイジャーやトリプル・メイジャーの時代である。この制度は、早急に検討し実施すべきであると考える。

「教員の教育業績の評価」の活用は、新しい科目の開発及び教育方法の改善、教育内容の充実発展のために有効であり、その実施に向けて検討すべきである。また、教員養成プログラムについては、免許取得までの修業年限を６年にするなど抜本的に改革し、その間、教員としての資質をチェックするためのリビユウを４回ほど行い、それを全てクリアした学生に対して修士号及び専修免許を授与し、指導力があって即戦力のある教員として学校現場に送り出せるシステムを確立する。そのためには、地域に開かれた大学として、学校現場と大学が提携し、現職教員にも研修の場を提供するとともに、教育実習前のオリエンテーション・プログラムの提供及び教員採用試験対策講座等の開設など、より一層の充実した教員養成プログラムを提供し支援する「教職センター」(仮称)の設置が必須である。

加えて、現在の「語学センター」を「外国語教育研究センター」と改めて、学内のネイテイヴの外国人教授陣をそのセンターに配置するなどして、大学が目指す国際的に通用する外国語運用能力と国際感覚を有し、国際社会で活躍する有為な人材の育成のための教育体制を強化する必要がある。また、充実したネイテイヴスピーカー陣や外国人留学生を有効活用するために、「国際談話室」を設け、多くの学生・教官が気軽に外国語に触れ、それを実践し、交流できる環境の創出も重要であり、その設置が望まれる。

琉球大学の重要課題であった法科大学院が、法人化後の目玉の一つとして設置されたことは、誠に快挙であった。その実現に向けて、法曹界や新聞社、同窓会など、各界の協力・支援の下に設置された法科大学院設置推進委員会の委員の皆様に対して感謝の意を表すとともに現職の学部長として微力ながら関われたことを嬉しく思う。

また、今年４月からスタートすることになった観光科学科にもエールを送りたい。願わくは、近い将来このプログラムを発展的に解消し、下記のようなことをキーワードとし、上述の「コミュニケーション領域」の設置計画案一部取り入れ、既存の学部組織のあり方を超えた文理融合型の「環境コミュニケーション学部」(仮称)および大学院を設置し、より実践的な教育を行い、通訳官や翻訳官、英語観光ガイド、コンベンショナリスト、ジャーナリスト、言語聴覚士、臨床心理士、社会福祉士、管理栄養士、インテリア・デイザイナー、環境デザイナー等の多岐にわたる国家資格を持つ人材を養成するのも一案である。

「保健」、「医療」、「健康長寿」、「健康食品」、「ＱＯＬ」、「栄養」、「福祉」、「臨床心理」、「観光」、「観光資源」、「エコツーリズム」、「観光とメデイア」、「観光と安全性」「観光と社会秩序」「コマーシャリズム」、「エンターテインメント」、「地域芸能」、「郷土料理」、「地域文化」、「伝統文化」、「大衆文化」、「文化遺産」、「自然環境」、「社会環境」「情報環境」、「物質文化環境」、「情報リテラシー」、「外国語」、「通訳」、「翻訳」、「言語コミュニケーション」、「非言語コミュニケーション」、「デイベート」、「プレゼンテーション」、「Ｅ－ラーニング」、「交渉・説得能力」、「企画・立案能力」、「地域計画」、「環境マネージメント」、「ＥＱ（心の知能指数)」、「まちづくり」、「総合交通システム」等

つまり、この学部の設置により、「地域特性と国際性を併せ持ち、世界水準の教育研究を創造する大学」とその中期目標・中期計画の中で詠われているように、地域特性が生かされ、２１世紀のグローバル化時代の要請に応えて、国際性、学際性、地域性、実践性等を念頭においた多くの教育プログラムを創出することになる。これが実現されれば、学生各自の専門分野及び外国語コミュニケーション能力・異文化コミュニケーション能力はもとより、その他より多くの分野の学術的見識を有し、より実践的・実務的知識を身につけた国内外で活躍が期待できる有為な人材の育成が可能になるものと確信する。

また、在職中に、韓国の全州工業大学、朝鮮大学、順天大学の各大学と大学間交流協定を締結する目的で訪問したことがあるが、順天大学や朝鮮大学では、科目の約２０パーセントは、学生がいつでもどこでもアクセスできるようにネット上でも科目を提供しているとのことだった。「知の競争」が激化する中で、諸外国は勿論のこと、日本の大学も国境を越えるような時代である。島嶼県沖縄に位置する琉球大学も、単に協定大学を増やすだけではなく、放送大学を活用するなど、実質的に国内外の諸大学と提携するなどしてE―ラーニン（遠隔教育）的な教育プログラムの提供が可能なシステムの確立を検討する時期ではないだろうか。

上述のような特色ある多くの教育プログラムを自由に創出していくためには、現行の蛸壺のようになった教官中心の教育研究組織を、この際、思い切って大胆に改革してみたらどうだろうか。あまり詳しく述べることはできないが、一案として、まず研究組織と教育組織を分離し、現在の６学部ある教員組織を「人文科学・社会科学群」と「自然科学群」及び「医学・保健学群」の３学群（仮称）に大

きくまとめ、教員をそれぞれ配置し、教育組織としての学部（これも現行のままではなく改革が必要）及び大学院の教育はこれらの教員が担当するような体制にする。このような改革により、科目がダブルことなく効率的に提供されるばかりでなく、大学の主役である学生を中心とした新しい魅力ある科目や教育プログラム（専攻分野）の創出が可能となり、また教員定員をフレキシブル且つ大胆に活用することによって新たな教育研究プログラムを創出するとともに学内における各種教育研究センターが充実･拡充し、教育研究がより一層活性化するものと確信する。学問の分野も時代とともに変化し、それに対する社会や学生のニーズも多様化していることから、大学は常にその変化に即応できる準備がなければならないと考える。そのためには、教員定員を固定化するのではなく流動化することによって、需要の多い分野や新しい分野にはそれなりの手当をし、その有効且つ柔軟な活用が可能なシステムを構築すべきである。ただし、基礎科学的な分野は当然のことながら保証しなければならない。教員は、ややともすれば各自の城を守ることに専念しがちであるが、この際、意識を改革して多角的・複眼的な視野にたち、琉球大学がこれまでに成し遂げた成果をますます拡げるために時代を先取りした人材育成の課題を設定し、学生一人ひとりが輝くような大学のグラウンドデザインを描き、それが着実に実施されることを願っている。

まだまだ、母校に対する熱い思いは続くが、紙面の都合で、母校琉球大学と本同窓会の限りなき発展を祈りつつ、この辺で拙稿を終えることにする。(2005年３月記)

1999.12　ハワイ大学にて
左から、筆者、桂幸昭元学長、David Iha ハワイ大学理事会事務局長、石川新次国際交流課長、花城皓夫経理課長補佐

2000.03　タイ国チュラロンコン大学にて
チュラロンコン大学キャンパス内にて伊禮恒孝経営学教授と筆者

琉球大学の地域貢献に期待

仲　門　勇　市
９期　文理学部法政学科

琉球大学は、平成16年４月１日に国立大学法人琉球大学として森田孟進学長を先頭に新たな発展へとスタートした。琉球大学を振り返ってみると、琉球大学は、昭和25年５月22日太平洋戦争によって灰燼に帰した首里城跡に学長、教官29名、事務職員15名、学生１,2年次合わせて562名で琉球列島米国民政府の布告（琉球大学基本法）に基づき創設された。そして、昭和41年に琉球政府立大学（琉球大学設置法、同管理法）となり、昭和47年沖縄の施政権返還に伴い国立大学として再スタートした。現在、琉球大学は、「真理の探究」、「地域・国際社会への貢献」、「平和・共生への追求」を揚げ、地域特性を生かした総合的、個性的な総合大学となった。

今年、琉球大学同窓会創立50周年を迎えるにあたり、同窓生の立場から母校・琉球大学の充実発展に期待したい。特に法人化後、琉球大学はどのように変革するのか、又地域貢献及び国際貢献のためにどのような施策を講じるのかについて期待をこめて次のとおり提言をしたい。まず、平成16年４月１日、森田孟進学長は、国立大学法人琉球大学としてスタートするにあたり、まず、「大学間競争と評価という新しい状況にのみ込まれることなく、沖縄の地域特性、亜熱帯の気候、生物の多様性、固有の歴史や文化などを生かした教育、研究で個性を図りたい」と大学の独自性を発揮していく決意を表明された（新聞報道）。その具体的な施策が中期目標計画である。又、森田学長は、法人化に伴い大学のマネージメントの変革、学長権限の強化と併せて教職員の更なる意識改革に期待する旨コメントされている。

そこで私見として次のとおり提言したい。

① 大学の建学の精神及び教育理念に沿った教育研究が生かされているか。
② 大学の使命である教育研究を通して地域貢献（社会）が重視されていた中、大学の知的研究活動が社会にどのように活用されているのか。（産官学連携事業・知的財産活用の成果）
③ 教育改革として学生が自ら考え、自ら教育研究活動に参加する教育システムの改革の必要性はどうか。
④ 教育研究、学生生活、大学管理運営等の第三者評価の実施
⑤ 大学経営の競争原理の導入つまり教育研究及び地域貢献を成就させることに伴い生産性を向上させるための大学経営戦略の確立
⑥ 大学の円滑な管理運営のために教員と事務職員との協働及び融合の実施更に大学当局との協働、融合の必要性はどうか。
⑦ 近隣大学との積極的な連携協力
⑧ 沖縄科学技術大学院大学（仮称）との積極的な連携協力強化を図るなど

以上について提言したい。そして、琉球大学が目に見える形で変革することに期待したい。又、学生が琉球大学で学んでよかった。さらに教育研究者が琉球大学で教育研究に従事し、社会評価を受けてその成果を上げ、地域社会及び国際社会に貢献することによって琉球大学で教育研究をしてよかったと云われることに期待したい。そして、応用研究以外に大学の教育使命である基礎研究には重点的課題として積極的、最大限の施策を講じ、実現されることに期待したい。さらに琉球大学の更なる発展は、同窓生にとっても喜びと誇りである。最後に、同窓会が母校・琉球大学の発展のために今何をやるべきかについて、この節目の年にあたり点検・評価を行い、母校の充実ン発展のために更なる支援拡大を図るため協力をすることが同窓会に課された使命である。

そして、琉球大学がこの大学改革のもたらす効果は、沖縄県のみならず日本、世界へ波及する一大効果であり、琉球大学の構成員一人一人の総力の下で諸課題の解決に当るとともに琉球大学の更なる充実発展に期待したい。

琉大同窓会事務所前（2006年２月）

琉球大学同窓会への思いと関わり

琉球大学同窓会事務局長
宮　城　武　久
９期　農家政工学部電気工学科

私が、同窓会に関わり始めたのは卒業後15年ほど経った、昭和51年頃からであったように思います。当時沖縄工業高等学校の教頭として又吉慶次先生が赴任しておりました。私は、教務主任を勤めていましたので、日々又吉教頭を補佐する立場でした。そんな縁もあって、同窓会「評議員」を続けて来ました。その頃は、電気工学科卒業生でつくる「電窓会」会長を経験していたこともあり、本同窓会に関わり続けることになったと思っています。又吉先生が高校長を定年退職してから同窓会事務局長に就任した当時の会長は、富永元順氏から安次富長昭氏に交替する時でした。その後大城盛三氏になり、現在の比嘉正幸会長に引き継がれる過程に参加して来ました。

その頃は、評議員会終了後、前述の会長や森田恒勝副会長、故「金城名輝」氏など、歴代正副会長達と二次会に同伴して行ったものでした。私は、未熟な三十代の後半頃でした。並み居る先輩は、県内優秀企業の代表取締役社長や公務員の重責にある方々でした。そんな状況の仲、二次会終わりの勘定では均等割でした。それには一つの感動と驚きを覚えました。流石「社長」だと感じたからです。むやみやたらに出費はしない。個人的交際では、平等にしている。立派な「社長哲学」を学んだ時でした。その頃の巷では、企業接待、官官接待が流行っていた時代でしたので、先輩社長達が先払いするものだと安易に考えていたものです。それからは同窓会では、みんな平等な扱いなんだと言うことを学びました。

そうして30年間ほど琉大同窓会に「評議員」として関わるようになり、母校の発展と琉大同窓会の隆盛に寄与するように勤めてきました。常日頃から「私の出来ることは、何でもお手伝いします」と先輩方に言って居りました。そんな時、平成14年６月中旬喜納事務局長からお呼びがあり、「研究者交流施設・50周年記念館」に引っ越したばかりの「同窓会事務局」に出かけました。喜納局長が「体調が勝れないから手伝いしてくれ」と言われ、急遽事務手伝いすることになり、結局事務局長を勤めることになりました。

当初から課題と事務処理が山積していました。日頃の事務を始め、会員名簿管理用コンピュータの更新とソフトの改善整備及び「入会金徴収方法」に関する大学当局との調整交渉や「大学グッズ」（Tシャツと琉大ウェア）の製作、同窓会「創立50周年記念行事」の推進が大きな任務となっていました。その外、７支部（平成16年12月久米島支部発足）との連絡、支部総会への出席や学部学科総会への出席など多岐にわたりました。

先ず初めに当たったのが、Tシャツと琉大ウェアの製作でした。デザインの募集を会員に実施しました。５期卒業で美術学科の岸本一夫さんが快く応募して、足繁く同窓会事務局に通い続け、労惜しまず協力してくれました。デザインは、琉大の学章を中心に芭蕉の葉をあしらって、見事に出来上がりました。多くの打ち合わせ時間を経て、Tシャツが平成16年３月に納品され４月の入学生に販売開始し

ました。また、琉大ウェアは７月になっての販売となり、琉大学生生協に販売を委託しました。しかし、期待した程の販売とは行かない状況でした。その外大学を支援する目的から学生の就職支援の「職業講話」を50周年記念館に於いて実施しました。その事業に多くの在学生や卒業生が受講しました。特に平成15年度10月から開始した教員採用試験受験対策には、直接同窓会事務局に多数の学生及び卒業生が指導に来室して、日々忙しくした思い出があります。このように同窓会が琉球大学を直接支援する事業に携わる事が出来たことは幸せでした。

創立50周年記念行事の開催では、記念講演会、記念式典、記念祝賀会、記念芸術祭等の企画と実施に携わりました。記念事業には、前述の他に終了記念として、学長と会長で「下り花」の記念植樹をしました。更に駐車場入り口に同窓会と50周年記念館入口の案内石柱の設置及び同窓会を表示する事務局窓側に石材「銘碑」の設置にも携わり思い出深い行事の数々となりました。

記念行事の最大のイベントは「芸術祭」の開催でした。記念行事委員会は、会長と副会長で構成され出発していました。委員会には、西洋音楽と琉球芸能関係者から活動家を入ってもらい充実することにしました。

数多く会議を重ねて、「琉球芸能」「西洋音楽」「美術工芸」の三部門を設置することを決めました。各部門には代表者を置きました。琉球芸能部門には、前川朝文さん、西洋音楽には、照屋寛八さん、美術工芸部門は、稲嶺成祚さんが選出されました。この部門を統括する部会長には、難渋しましたが、副会長の赤嶺健治さんが勤めることになりました。しかし、諸般の都合で美術工芸部門は、今回は急遽中止することとなり残念でした。

芸術祭のサブテーマに「琉球芸能と西洋音楽の夕べ」として、実施することになりしました。数多くの会員が、県立郷土劇場や50周年記念館、琉球大学体育館等を使い、何度も稽古を重ねました。このような取り組みと会員多数の全面的協力のお陰で、盛大かつ華麗な舞台を演出することが出来ました。更に好都合なことに前述した同窓会製作の「Tシャツ」を琉球芸能公演の幕開きに舞台衣装として着用し、出演して母校のアピールに貢献してくれたのは大感激でした。

こんな時期に多忙で、多様な活動が出来て、無事各種記念行事を終えたのは、私にとって至上の幸せを感ずる者です。これからも母校と同窓会の隆盛がつづく事を願い、出来る限り尽力して行きたいと思っています。

50周年記念式典で役員も琉大逍遥歌斉唱

バレーボール部活の思い出

福　原　兼　伸
９期　教育学部体育科

昭和32年４月琉球大学に将来の体育教師を目指し、希望を胸に入学した。体育科の先輩たちは、先生ではないかと思うほど貫禄があり後輩たちをリードしていた。体育施設、グラウンド、体育館と不十分であったが、体育の授業、部活動も創意工夫して一生懸命頑張っている時代であった。

私は幼い頃からバレーボールをやっていたこともあり、また高校の先輩、宇地原徳淳氏、野島英秀氏、赤嶺朝栄氏、松野英輝氏がバレーボール部で楽しそうにやっていたので迷うことなくバレーボール部に入部した。

主な活動の場所は男子寮の中庭コートであった石粉のコート。灼熱の太陽の下、時には風雨に悩まされながらの練習で、スライディング等で肘、膝、あご、胸など擦り傷が絶えない毎日であったが楽しく非常に充実していた。

当時のバレーボールの試合は、学校のグラウンドでコートを設営して行われ、試合はグラウンドコンディションによって大きく左右されバレーボールの技術と気象条件の状況判断によって作戦も要求された。

高校生の頃から一度も優勝の経験のない私は、デビュー戦で優勝し非常に感動したものである。その後先輩たちの築いた伝統を受け継ぎ、また素晴らしい後輩たちも入部し一段と練習にも熱がはいるようになった。宮古農林高校、久米島高校、仲泊小中校、北部農林高校、国頭中学校と合宿練習を行い一段と戦力もアップした。以来4年間県内大会全試合を制覇し、当時県バレーボール界をリードした平安座教員チームから琉球大学チームの時代となっていた。

私たちの努力と実績が認められて、昭和35年第15回熊本国体に沖縄一般チームとして派遣が決定され部員もついにやったかと喜びも大変なものであった。自分たちの力がどうなのか、他県チームとの対戦が皆無だっただけに戦力を知るうえでもそれを知る機会が与えられたことは、非常に意義深いものであった。

熊本国体は、沖縄が第７回大会の初参加以来未だ正式参加ではなく、競技運営に支障がない限り、地域予選を経ることなく参加できると、の特例の配慮によるものであった。バレーボールは一般男子の部への参加であった。

監督にバレーボール協会役員の阿波連宗政氏（那覇市役所）コーチに琉球大学バレーボール部顧問の外間政太郎氏、選手はFRの仲井間弘武（ラジオ沖縄、沖水卒）以外は琉球大学のメンバーであった。FL福原兼伸（４年）、BC宮里孝三（４年）、HL石川晴祥（３年）、BL宇地原徳福（３年）、HR金城珪壱（３年）、当山清林（3年）、HC亀川　爵（２年）、FC与儀玄毅（１年）、BL浜元盛正（１年）、監督以下12名であった。

沖縄県国体バレーボールチームは、最後の調整を宮崎県旭化成で行う為、一週間ほど前に出発した。現在のように飛行機の時代と違い、船、汽車に乗り継いでの会場入りであった。当時は本土に行くにもパスポートが必要で、予防接種で赤く腫れ発熱するもの、２．３日足が地に着かず汽車に揺られての大会参加でコンディション作りも大変であった。旭化成チームは実業団チームとして活躍しており、そのチームと練習することによって試合経験をさせようと外間コーチのはからいであった。チームには、高校を卒業したばかりの198cmの南将之選手がいたが、まだ強力なスパイカーではなかった。立ったまま両手首がネット上に出るのを見るとこんな大きな人がいるのかとびっくりした。２日ほどの練習であったがなんとか戦えるようになり旭化成チームの監督やコーチからいろいろなアドバイスを受け旭化成を後にした。

大会地の八代駅に着いたのは夜になり、私たちを迎えようと花束贈呈や歓迎の準備もしていたようだが到着が遅れ大変失礼なことをしたと思う。宿舎は八代市の球摩川添いの昭和旅館であった。沖縄チームの受け入れで、言葉は通じるのか、食事は口にあうのか、等真剣に心配していたようだった。宿舎の皆さんの温かいおもてなしで食事もおいしく特に八代米の味は格別であった。私たちは、試合会場である八代城跡コートで最後の調整を行い全員故障者もなくベストな状態で試合に臨むことができた。

日本鋼管との試合は、出発前から知っていた。関係者をはじめ何点取れるか一致した見方であった。外間コーチも「一般男子としてははじめての参加、相手は日本一のチームだけに手強い」自分たちの力がどれくらい通用するのか、皆目分からず盲、蛇に怖じず的なところもあったようだ。

試合は10月24日、２時40分開始された。１セット沖縄の強烈なサーブと前衛・中衛からのシャープなスパイクが決まり日本鋼管は一方的な防衛に回って21－14。２セットにはいって体勢を持ち直した日本鋼管が前半11点までリードであわや、と思ったが阿波連監督がタイムを要求。サイドから攻めつけて16点で挽回、その後21－18で難なく逃げ切った。

本当に無心で無我夢中、いつのまにか試合は終っていたと感じた。勝因は皆が一つになって声を出したこと。ダブルファストサーブを打ったこと。ベストコンディションであったこと。県人会を中心にスタンドの応援が全て遠来の沖縄へ寄せられたことで、持てる力を十二分に発揮できたこと。中でも石川晴祥選手のスパイクはあのしなやかな体、豊かなジャンプ力で相手のブロックの上を行く高さとパワーで14得点をたたき出し大会関係者からも全日本級だとの高い評価であった。

翌日全員未だ興奮から覚めてなかった。結局富士鉄室蘭に２－０で敗れた。今大会日本鋼管を筆頭に九州の住友金属、富士鉄室蘭の優勝候補に挙げられていただけに沖縄チームのストレート勝ちは大きな番狂わせを演じたわけで地元新聞にも大きく取り上げられた。大会関係者からも高く評価され、沖縄チームが大きくクローズアップされた。外間コーチは「日本で一番強いチームに勝つとは夢にも思いませんでした。沖縄チームはチームワークがとれていた。本当に嬉しくて、嬉しくて」と述べている。

八代入りして約10日間、昭和旅館の方々、

大会役員、補助員、十条製紙のチーム、県人会、地元の皆さんには心からなる親切にしていただき感謝の気持ちでいっぱいであった。日本鋼管に勝った満足感とお世話になった方々への感謝の気持ちを胸に帰路についた。

翌年、沖縄教員バレーチームとして第16回の秋田国体に９人制、６人制の２種別に参加。９人制では、これまた優勝候補の東京代表世田谷教員に２－０でストレートで勝利した。そのとき９人制バレーならば全国制覇も夢ではないと感じた。

その後昭和37年第17回大会から９人制が廃止され、６人制のみとなり昭和52年第32回青森国体成年男子種別に９人制が復活し、53年長野国体から９人制女子が追加された。昭和６２年海邦国体で、９人制男子沖縄銀行、女子琉球銀行チームが悲願の初優勝。平成16年第59回埼玉国体で中部徳洲会病院が優勝。昭和35年第15回の熊本国体に初参加以来、沖縄の９人制バレーは今や全国でもトップグループであり、全日本総合、実業団、国体と３冠に輝くチームを輩出している感慨無量なるものがある。後輩たちの指導者、選手の努力・活躍に感謝し。願わくば小・中・高の６人制バレーボールもこれ続きたいものである。

第15回熊本国体で強豪日本鋼管チームを破る。沖縄一般男子チーム
―石川選手の力強いスパイク―　昭和35年10月　於　八代市

「琉大」とともに

金　城　幸　秀
10期 農家政工学部農学科

琉球大学は、戦後県民や海外同胞の期待を受けて廃墟の中に誕生した。そして、半世紀の歳月をへて、広大な西原町千原の地に根をおろしている。

琉球文化の象徴ともいえる首里に誕生し、その後、めまぐるしく変遷した歴史は、布令大学から政府立、また国立大学と常に沖縄のおかれた政治情勢から惹起される問題と絡んでいたが、それを乗り越えて大きく発展してきた。

しかし、首里時代の小さな８ミリ大学は、混沌とした沖縄の社会の中でも気高くアンテナをたてオピニオンリーダーとしての姿勢を貫いていた。このような中で一期生の和気さんなど学生自治会のリーダー達が同窓会出発の母胎であった。

1950年大学創立とともに入学した学生達は、卒業を契機にそのまま同窓会を引き継ぎ50年の歩みを踏んだことになる。全卒業生を構成員とする穏やかな連帯として、今日では極めてまれな大学一本の同窓会が誕生したのである。

待望久しい我が郷土の大学として全県民の期待を担っていた琉大は、大学と言えば「琉大」と、まるで大学の代名詞のような印象すらあった。

古き都にさすらいて世紀のあとを尋ねれば・・・逍遥歌の一節にもあるように首里時代の学生達は、青春を謳歌し郷土の発展に尽すものと希望に燃えていた。デカンショもサイエンスも芸術も全て吸収するべく純粋な気持ちで勉学に勤しんでいた。

私は、1962年に卒業して、そのまま大学に居残った組として大学に勤める傍ら、同窓会事務局のお手伝いをしてきたが、当初は、同窓会の存在さえも危ういもので、大学の片隅に隠れるように事務所はあった。同窓会があることの必然性などと大げさなことはなかった。同窓会のお手伝いは、卒業証書を頂いた手前、我が母校のことを少し手伝うつもりであった。

しかし、そこで培った友達や先輩は、私など及びもつなかい愛校心に溢れていた。特に創立当初の先輩諸兄は、学ぶとは名ばかりの時代に先生や職員と一緒になって琉大の礎を築いてきたのである。

これまで、大学と同窓会の二つの窓を通して思うことは、同窓会が常に恩ある大学への支援を一義としていることである。組織としては、小さく細い時代もあったが、先輩諸兄の指導があって引き継いできた。中でも、苦しい時代は、事務所を大学職員が兼ねていた時代である。仲宗根健三（政・法4期）さん、

砂川栄介君（法政12期）、儀保博信君（社会14期）、砂川寛昭君（法政16期）等のご苦労があった。

復帰後の卒業生達には、本県以外の卒業生も多く全国で活躍している。彼らは、卒業して始めて、我が母校のことなど同窓会へ聴いてくる。いわゆるルーツ探しである。他県では、大学同窓会に所属する意味合いが強く、帰属する同窓会があって始めて何々大学卒と実感するのであろう。

大学は、1950年創立から1982年頃までに大方の学部移転は終わり、６学部、８大学院、１専攻科や附属病院を擁する総合大学として磐石の備えを整えつつある。しかし、琉大の歴史は、今緒についたばかりである。

現にある大学はもとより、卒業した学友の総体が同窓会を形作り、横の連帯から縦の連帯として先輩から後輩へと50年の歳月を踏み、琉大の琉大たる学風をつくって行くのである。また、念願だった同窓会事務局を、琉大50周年記念館内に設けることができて喜ばしい限りである。

今や望まれる同窓会として、同窓会が中継基地として機能することにより会員相互の親睦を図るとともに、最新の大学の事情や、会員からの情報を常に発信し、時代を担う人材育成に寄与すべく母校琉球大学を支援しなければならない。

復帰後の琉大も、沖縄の特殊性を強調しながら、国立大学の一員として各県に設置された新設大学の普遍的なパターンに追いつこうとしてきたにすぎない。

大学も法人化され、地域に根ざした真に特色ある大学の使命が問われるようになった。従って、同窓会とのつながりは、大学の存在さえも左右するほど重大となってきた。競争の中で生き残るには、同窓会も一丸となって進むしかない。

５万人余の卒業生と学部学科の垣根を超えた連帯は、我が同窓会の誇るべき姿勢である。歴史は浅くとも激動の半世紀の上に立派な学風を築いていきたい。

電気工学科3期卒の思い出

又　吉　宗　敏
11期　農家政工学部電気工学科

私達15名が、琉球大学農家政工学部電気工学科に入学したのは、1959年の４月でした。電気工学科が出来てから３年目で大学は、首里城跡にありました。今、思い出してみると施設、設備も不十分で、講義は普通科教室で受け、電気実習のみ、科の教官室のある首里城跡（現在の復元された首里城）の西側、那覇市が一望出来る、放送局跡でうけていました。強電関係は直流電動発電機、交流電動発電機、柱上変圧器等の実験をし、弱電関係では真空管やダイオード等による静特性実験等もやりました。工業高校出身の学生には、見慣れていたかもしれないが普通高校出身の学生にとっては、全て初めて見るもので、緊張感を持って実験したことが思い出されます。指導教官は、東盛良夫先生でした。先生は、平成15年に古稀のお祝いをされていますが、２年に１回開かれる電窓会（電気電子系工学科の同窓会）総会にも参加されるし、また、電窓会有志による年2回のゴルフコンペにも元気に参加されています。先生のゴルフはスコアを気にせず、前向きで、伸び伸びとプレーされます。これからも毎年一緒にプレーしたいものです。さて、一緒に入学した15名は、様々な事情により、一緒に卒業したのは、10名でした。それでは、私が知っている範囲で卒業後の10名について紹介します。最年長の照屋健氏は、大変努力家、勤勉家で、勤めていた軍の職をやめ、琉大の英文科に合格するも、これを辞退し再受験で電気工学科に合格した方です。卒業後、琉大に残り、論文を発表し、教授まで昇進され、2000年の退官後も沖縄大学のマルチメディア教育研究センター所長として現在も活躍中であります。上里勝實氏は、大学院に進学、リラクタンスモーターの論文を発表し、琉球大学の助教授、教授となられ、電気エネルギーの分野、沖縄県の産業行政、電気学会の発展に大きく貢献し、2005年3月に退官された。儀保勝彦氏は、県庁職員となり、現在、（財）移動無線センター沖縄支部長として活躍中である。又、彼には、今年の琉大同窓会50周年記念事業の講演会、記念式典にも参加して頂きました。久場川森男氏は、沖縄電力(株)に入社、部長まで昇進後沖縄電力(株)の協力会社の1つである沖縄通信ネットワーク(株)の社長に栄転され、更に沖縄県通信業協会の会長として活躍中である。高田治氏は、横河電気(株)に入社され、努力の結果、取締役まで昇進、その後同社関連企業の(株)テクノサーバーの社長となる。その後退職され、(株)沖電システムの相談役として奮闘中である。彼は、横河電気在職中、琉大の多くの後輩達の横河電気入社に尽力されたと聞いている。奥間政直、豊川勲、山口宏氏は残念

ながら若くして既にご逝去されています。最後に私、又吉宗敏は、工業高校教員となり、37年間の教職生活を無事に過ごし、2000年３月の定年退職後は、ゴルフをしています。以上７名の内４名とは、今も年に４回程度、一緒にゴルフを楽しんでいます。次に大学4年間で、特に、印象に残っていることは、4年次における大学祭でバレーボールの部で我が電気工学科が優勝できたことである。証拠写真もあるので、掲載されれば幸いである。アタッカー、サーバー、レシーバー、トスサーの役割を各自が自覚し、協力した結果が優勝につながったと思っている。又、ダンスパーティー等も多く、楽しく学生生活を送れた事も今は懐かしく思いだされます。今後は、母校の更なる発展を願い、琉大同窓会員、電窓会員、友人として、健康に気を付けながら、各自の役割を果たすことが出来れば良いなと思っています。

大学祭のバレーボールの部で電気工学科優勝

琉球大学の思い出

幸　喜　徳　子
14期　教育学部体育科

＊首里キャンパスの頃

1962年から４年間、教育学部保健体育科を専攻、首里キャンパスにて学んだ。当時、アメリカの施政権下にあった沖縄県では通貨がB円からUSドルに切り替わった後で、授業料は年間、30ドルであった。入学の前年にはポールキャラウェイ中将が第３代高等弁務官として沖縄に着任し、アメリカの政策が政治、経済、教育、文化等、県民生活に一層大きな影響を与えている時代だった。戦後復興は進み、奇跡の１マイルと呼ばれた国際通りや平和通りは賑わっていたものの、人々の暮らしはまだまだ厳しい状況であった。

しかし、学生等は皆希望に燃え、活き活きと学生生活を送っていた。キャンパス内の立派な各学部ビルの他、現在の県立芸術大学の敷地に男子寮、首里城、首里杜館の南側に新築間もない近代的な女子寮があった。その他キャンパス近辺の民家等に学生等は下宿をし、首里は真に学生街で活気があった。

＊保健体育学科にて

私は大学卒業後、世界各国を駆け巡って仕事をし、見聞を広めたいとの目標があり、航空会社の乗務員になろうと考えていた。一般教養、語学力の他、平衡感覚、運動能力等も必要らしいとのことで、教員資格を目指す一方、器械体操部に籍をおき入社試験に備えることにした。

当時、体育館は木造校舎を二つに仕切り、一方は体操部、他方を柔剣道部の練習場にしていた。施設設備も充分整ってなく、先生方も指導に相当なご苦労をされたことだと思う。入学当初、器械体操部は男子選手が殆どで、彼らと共に練習し指導を得て技の向上を図った。体育科は先輩、後輩の折り目正しいけじめの中にも家族的な雰囲気があり、技術指導において先輩方は非常に頼もしく，有難い存在だった。２年次以降は女子体操選手が次々入学、卒業までお互いに切磋琢磨し、充実した活動ができた。

女子学生は将来の体育指導者としてピアノは必修であった。家庭にピアノなどない時代、学科全体に対し一台のピアノが用意され有難く、皆、一生懸命取り組んだ。

1963年、体育館が完成し最新式の器具等も揃った。施設設備の立派さに圧倒され感動した。落成記念に当時大活躍の大松監督率いる「東洋の魔女」と呼ばれた世界最強の日本女子バレーボールチームが来県し模範試合が行われた。私は線審として選手等を目の当りにし、彼女達が巨人の国からやってきたかのような背丈で驚いた。速攻やフェイント、時差攻撃等、彼らが開発した最新戦略は目を見張る技術であった。

‘64年は東京オリンピック開催の年で聖火リレーが沖縄を縦断し、陸上部の学生達も走った。

＊大学祭のこと

大学祭には体操部は器械体操の模範演技を体育館に詰め掛けた観客の前で披露した。琉

大体操部は普及の為、県内各地で演技の紹介や指導を行っていたが、大学祭では特に部員一同、最高レベルの技をと、張り切って臨んだものだった。琉大では郷土芸能クラブの活動も盛んで私は入学当初から所属した。先輩達が立派な運営をしておられ、沖配電ホールや琉大体育館で定期発表会が行われ、私は琉球箏と琉球舞踊を担当した。２年次には琉球箏曲興陽会の琴の教師免許状も取得できた。大学祭は、他の各部の発表も充実し学生等の情熱が伺え、楽しみなイベントであった。

＊社会背景と学生

専攻の教育関係を初め、英米文学の研究、英語講読、英会話等どの授業も興味深く、先生方の名講義も懐かしい。

３年次の頃、1965年は佐藤栄作総理大臣が沖縄を訪問し沖縄の祖国復帰を重点施策として声明発表した。松岡政保主席が選挙により誕生した年であった。そして米国がベトナム戦争に介入し、嘉手納基地から戦地へB52が飛び立つようになった年でもある。

祖国復帰運動も更に激しさを増し、キャンパス内でもその機運が高まる一方、新しい体育館を利用して各サークルの資金作りも盛んであった。クリスマス前にはよくダンスパーテイが開かれ、社交ダンス花盛りの頃だった。巷では桜坂社交街が賑わいを見せていた。

体育館では種々のコンサートも頻繁に開催され、会場設営は私たち貧乏学生にとって格好のアルバイト口であり、クラシックを無料で鑑賞できる機会でもあった。

＊東京オリンピック体操選手団来沖

１９６６年、4年次の時に、東京オリンピックで優勝した小野喬団長率いる体操チームが来沖し、各地で模範演技を披露した。幸いに沖縄代表選手として私もチームに参加させて頂き光栄であった。奇しくも38年後の2004年、小野喬団長の奥様、小野清子氏は国家公安委員長となられ、私は沖縄県公安委員として九州公安委員会の席で親しくお目にかかる機会を得て嬉しいご縁であった。

＊琉球大学の修学旅行

学生生活最後の夏休みは琉大主催の修学旅行に参加。鹿児島から日光までの旅、パスポートを所持し先生方の引率で多くの学生が初めて本土の土を踏んだ。全てが新鮮な体験で成果は大きかった。東京で解散し各自帰途についた。鹿児島では台風に足止めされ、学生等は旅費を使い果たし途方にくれた。一計を案じ、鹿児島大学の女子寮に泊めて頂いた。停電の中、ローソクを灯し両大学の学生等が意見交換、懇親会を行った。最後は一同にフォークダンスを手解き、ダンスパーテイとなり笑い声に溢れた思い出深い交流会となった。

＊おわりに

卒業と同時に県立豊見城高校の創立時の教員を拝命。開校時は運動場も未整備で、米軍人がブルドーザーで連日作業を行い学校整備に協力してくれた。

貴重な教員の経験を経て航空会社の乗務員となり世界の国々を駆け巡った。仕事の傍ら各国で見聞を広め、学生時代に育んだ目標を遂げることができ幸運であった。

琉球大学の諸先生方の素晴らしいご指導、学生部他、各セクションの皆様の親身なご支援は今もって印象深く、母校を誇りに思うと同時に日々感謝の念を深くしている。

同窓会創立50周年を祝し、母校及び同窓会の更なる発展を祈念すると共に比嘉正幸会長初め関係各位のご労苦に対し心より敬意を表し、御礼申し上げます。

琉球大学に感謝して

高　嶺　朝　勇
14期　文理学部化学科

私が琉球大学文理学部化学科に入学したのは、1962年４月である。キャンパスは、首里城跡にあった。入学当初、私は、同郷の親泊寛雄君と大中町で間借り生活を始めた。私たちは18歳。詰め襟の学生服以外によそ行きの服もなく、やっと丸坊主の頭から髪を伸ばし始めたばかりであった。玉城村から出てきた二人にとって首里の町は、やはり刺激的であった。池端町にあった「湖畔」という喫茶店に親泊君と先を譲り合いながら恐る恐る入った記憶は、思い出しても微笑ましい。高校生は喫茶店に入れない時代であった。

何もかも新鮮でバラ色に思えた大学生活は、半年で躓いた。講義内容が難しく、必修の解析Ｉが単位保留になった。教官の石川先生からは、「大学に入ったからといって、今のように怠けてばかりいては、卒業もおぼつかない。」と注意された。高校時代、数学は得意科目であっただけに、私は、大学生活に自信を失った。努力不足を棚に上げて、理数科系の才能を疑った。退学して文科系に受け直そうかとも思ったが、畑で働きづめの両親の姿を思うと、そんなことはとても言い出せない。悩んだ末に、補導教官の森巌先生に相談した。こうして私は、幸運にも一年次にして森研究室の研究生のような立場になった。

やがて、同期の岸本直君、一期先輩の幸地貞子さん、一期後輩の大城洋子さんが入ってきて、先生の研究を手伝うようになった。森巌先生は、沖縄の天然有機物の研究をしておられた。当時、イジュの樹皮に含まれる魚毒作用物質の研究が中心で、岸本君が抽出を担当した。私は、ユウナの花の色素であるアントシアンの抽出を担当した。森先生と私たちは、ときどき採集に出かけた。金城町、寒川町など現在は住宅地になっているところも、ほとんどが畑で、春にはルリハコベの採集に行った。採集の打ち上げに森先生が、決まって私たちをレストランなどに連れて行ってくださるのも、楽しみであった。

森先生は、お酒が好きであった。私と岸本君は、森先生のお供で、よく場末のオデン屋に行った。いつも先生の奢りであった。講師の給料では、大変だったと思う。酔うと必ず「お馬の歌」を歌われた。研究室では恐い先生が、「小さいときから面長でヒンヒン育ったのんき者……」と、ユーモラスに歌われると、楽しかった。お家までお送りしたとき、奥様に叱られ小さくなる先生にも人間味を感じた。ある時、私一人で先生をお送りしたことがある。帰ろうとすると、「泊まって行け」とおっしゃる。翌朝、コソコソ帰ろうとすると「味噌汁をのんで行け」とおっしゃる。とうとう、朝食までご馳走になってしまった。

森先生は、学問に関しては大変厳しい方であった。単位保留も遠慮無く出しておられた。私は、先生に褒められた記憶がない。教職に就いてからも、何回かお叱りを受けた。できの悪い弟子であった。しかし、先生は、実に温かい方であった。

学業に身が入らない私を、密かに心配しておられた。私は、そのことを岸本君から聞いていたが、先生は、何もおっしゃらなかった。ただ、修学旅行に私を誘って下さった。そして、東京で団体行動が解散になってから、二人だけで紀伊半島の旅をしょうと計画を立てておられた。あいにく折からの大地震で鉄道も不通になり、紀伊半島は諦めて福岡の箱崎にあった沖縄学生寮で３日ほどお世話になった。

帰りは、鹿児島から船に乗ったが、台風で１週間ほど足止めを食らい、金も使い果たして、沖縄県人の経営する旅館から借金をして那覇港に着いた。その旅行の間に先生のお宅では、お子さんが誕生していた。今でも、奥様に申し訳ない気持ちで一杯である。

私のように我が儘で、先生に迷惑ばかりかけていた学生を見捨てず、厳しく温かく育てて下さった森巌先生の教育愛。先生自らも、夏休みなどは九州大学に通って、学位を取られた情熱。そのような師弟関係と研究体制を支える仕組みが当時の琉球大学にあったということは、私にとって誠に幸運なことであった。還暦を過ぎて、来し方を振り返るとき、森巌先生との出会がなければ今日の私はないと、しみじみ有り難く思う。

化学の同期生は、男ばかりで12名。みんな仲が良く、良いことも悪いことも一緒にやった。母子家庭であった岸本君の卒業式用の背広代を、みんなで飲んでしまったこともある。飲み足らずに、「ああ玉杯に花受けて・・・」と大声を張り上げながら国際通りを集団で首里に帰る途中、暴力団の親分に「気に入った」と言われてみんなで奢られ、お店のママさんを驚かせたこともある。

定量分析の苦しい実験を深夜まで一緒にやった仲間たち。寮の夕食や大学食堂の焼きソバを分け合った仲間たち。落ちこぼれそうになった私を支えてくれた仲間たち。私の場合は、特に、この仲間たちの助けを抜きにしては、今日を語れない。

私は、理科の教員を確保するために県が給付する奨学資金を受けていた。そのために、卒業と同時に宮古高校に職を奉じた。教育実習の経験はあったが、本職の初年は辛いものであった。一時間一時間の教材研究で、毎日、午前1時頃まで勉強しなければならない。ノイローゼになって辞めていく人もあった。

しかし、ここでも、私はラッキーであった。同僚の化学の先生は、化学科の先輩の下地康嗣先生であった。当時、名門・宮古高校では、旧師範学校卒業の先生や、帝大卒の年輩の先生方が多くおられて、出来たての琉大を卒業した先輩達が、肩身の狭い思いをしておられるふしがあった。

そんな中で、下地康嗣先生は、琉大の化学の後輩ということで私をかわいがって下さった。授業も、学級経営も家庭訪問も、手取り足取りで指導してくださった。下地康嗣先生のほかにも、琉大出身の先生方が大勢おられて、よく飲み、よく交流し、仕事の上でも同窓生として力になって下さった。私の高校教師としての基礎は、すべて宮古高校の３年間で築かれたと言っても過言ではない。

私は、38年の公務員生活で16年は教育行政の仕事をさせていただいたが、ここでも、同窓の大先輩の方々にお世話になり、温かく育てて頂いた。この先輩方の教育界における実績と人望を見るだけでも、改めて、琉大同窓生の人材の厚みを感じないではいられない。

私を、何とか世間並みの人間に育てて下さった琉球大学、恩師の先生方、同窓生の方々には、感謝の言葉も見つからない。

琉球大学同窓会設立50周年に際し自らの原点を想起する機会を得たことは誠にありがたいことであった。

琉球大学に感謝して、その限りないご発展を同窓の皆様と共々に祈念する次第です。

母校への思い出

竹　越　堅　哲

14期　文理学部法政学科

昭和36年（1961年）4月、私は琉球大学文理学部（現法文学部）法政学科に入学しました。私は、八重山高等学校へ入学し、一年終了後、家庭の事情により、2ケ年間休学を余儀なくされ、自宅黒島へ帰って、農業と漁業に従事し、父を助けました。その中でも、大きな収入を得ようと思い、父の勧めもあって、当時、胃腸薬、虫くだしの薬として脚光を浴びていた海人草採集業に、行く事にしました。台湾の南約100キロの位置にある東沙島（プラタスともいう）という無人島の周辺の海で、平均水深約6mから７mの海底での素潜（すもぐ）りの採集業でした。一航海３ヶ月という期間を決めて、強風25メートル以上でないと休業はなく、41トンの船に38名が乗り込んで、午前5時には、潜り長の毎日一分も違わない朝起きの合図で全員起床し、慌ただしく朝食を済ませ、各自割り当てられたサバニに乗り込んで、現場で日の出を待ち、日の出と同時に海に飛び込んで仕事を開始し、昼食時間の一時間は休憩が与えられ、日没までの強制労働でした。

２年後、高校へ復学し、卒業後、黒島小中学校で教鞭を取った事、琉大受験の為那覇へ出て、アルバイトしながら受験勉強をして、合格を勝ち取った事等、いろんな事が、脳裏に浮かんで、入学の喜びもひとしおでした。

大学へ入学はしたものの、当時の沖縄は、米軍の直接統治下にあったので、米兵士達による犯罪行為が頻繁に発生していた。その度毎に、学内では、学生会主催による抗議集会が開かれ、事件が大きい場合、即ち、事件の違法性が強く、社会的非難が大きい場合は、大学から集団で那覇市へデモ行進し、国際通りを、時にはジクザグデモをしながら琉球政府前、あるいは、琉球政府行政主席官舎前まで行進し、解散した。行進の過程で、警察官と衝突し逮捕される学生も多かった。

私は学生運動は程々にして勉強に打ち込もうと思いましたが、一年生の後期に、法政学科の中央委員に選任されてからは、勉強がほとんど出来なかった。二年生の時には学生会執行部長、三年生の時には、学生会中央委員会議長、四年生の時には法学研究クラブ部長に選任され、アルバイトも家庭教師を二ケ所掛け持ちしていたので、腰を据えての勉強が出来なかった。

三年生の時の夏休みに、沖縄の現状を訴える為、学生会の役員として、会長他5人の役員と共に、本土の学生会の役員と意見交換会が持てた事が印象的です。九州大学を始め北海道大学まで、10の大学の学生会の役員との意見交換が出来ました。学生運動が盛んな頃の学生会のリーダーと言えども、沖縄の実情をあまりにも知らな過ぎるのにはショックを受けました。沖縄の人達は英語でしゃべっているのですかとか、沖縄の子供達は裸足で通学しているのですかとか、その他いろいろありました。

当時の琉大は、本土の国立大学の運営方式を取り入れ、アメリカのミシガン州立大学と

も提携しているとの事だった。一年生、二年生の教養学部の授業は、先生と受講科目は、学生が主体的に選択出来た事も、おもしろいと思いました。

当時の諸先生方は、学生を教え、育てるのに一生懸命だったように思います。三年生、四年生の専門に入っての金城秀三先生の刑法の講義、砂川恵伸先生の民法の講義、新城利彦先生の国際法の講義が印象的でした。金城先生は講義の時間になると、教室に入って来られて、教壇に立つや否や、出席の確認をせず、いきなり、例えば、刑法とは、犯罪と刑罰に関する法である。犯罪とは、構成要件に該当し、違法、有責な行為であるとか、教科書に書いてあることを、すらすらとしゃべっておられるので、緊張しながらも楽しく講義が受けられた。お陰様で、今では、刑法が一番理解しやすく、おもしろい法律です。砂川先生は、民法の基本判例集を使っての講義で、法律を学ぶのに、いかに判例が大事であるかを教えて下さいました。生きた民法の授業であった事があとで分かり、感謝しました。新城利彦先生は、偉大な法哲学者、ケルゼンの著書を使っての講義でした。難しかったけど、おもしろかった。

戦争によって日本本土から切り離され、米軍の統治下にある琉球大学に、文部省（現在文部科学省）も理解を示され、時には、一流の学者や大学教授を沖縄へ派遣された。その中で、日本で初めてノーベル賞を受賞された湯川秀樹教授、刑法の大家であられる京大の滝川幸辰教授、民法の大御所学習院大の中川善之助教授の講演を、体育館で聞いて感動しました。

当時の琉大は那覇市首里にあり、現在の首里城の敷地に創立された。高台にあるので、いつも那覇市全体を見下ろしながら、南部一円、東の与那原、北の浦添等を見下ろしながら、沖縄の最高学府琉大の学生だという自覚が学生みんなにあったように思います。キャンパスは大きくはなかったが、芝も根付き、ところどころ芝原もあり、木陰もあり、友人達と数人で車座になって沖縄の現状について度々議論もしました。私は、沖縄の日本復帰が出来るものかどうか、真剣に考え、悩みました。

琉大へ入学し、４年間学んで、本当によかったと思うことは、沢山ありますが、なかでも、人間の真の自由と平等がいかに大事であるかを学んだこと。学問を研究し、学識を身につけ、真理を体得して、それを実践することによって、人間性が磨かれ、人格が大きく成長して行くんだなあ、という事。それから、優秀な、素晴しい友人達に出会ったことでした。

私の今日あるは、何といったって、母校琉大で学んだお陰だと思います。そこで、母校への恩返しに何が出来るかを考えてみると、いろいろありますが、手っ取り早く、確実な方法は同窓会に協力する事だと思います。同窓会も創立50周年を迎えました。創立以来、歴代の会長をはじめ、役員の皆様が、必死に頑張って支えた賜だと思います。特に安次富長昭先生が会長になられて、組織を立て直された事、即ち、評議員の選出を、全学科、地域等も考慮されて、公正になされた事が、その後の大城会長、現在の比嘉会長のもとで、同窓会の組織が強固になったものと思います。母校の創立50周年の記念行事、その他小さな行事にも、同窓会が全面的にバックアップしています。我々の母校琉大が限りなく発展していくには、琉大同窓会がしっかりした強固な組織として、発展して行かなければなりません。卒業生の皆様はもちろん、現役の学生諸君も、もう一度、我々の琉大同窓会に関心をもち、しっかりと支えて行こうではありませんか。我々の母校琉球大学の発展と我々の琉球大学同窓会の御発展を心から御祈念申し上げます。

琉球大学同窓会創立50周年記念にあたり

志良堂　清　治
15期　文理学部商学科

昨年の12月にわが同窓会が創立50周年の節目を迎えた年に、私も60歳の還暦という人生の節目を迎えた。人生の折り返し点に立ち感慨無量である。

昭和38年4月、首里キャンパスの頃に琉球大学に入学し、昭和42年４月の卒業と同時に主任教官の外間完和先生や島村潤一先生の薦めもあり志を同じくする親友３名と琉球銀行に入行した。

以来35年間、銀行業務一筋に邁進し、東京事務所長や大阪支店長の県外業務経験の後、人事部長と取締役事務統括部長を経て、常任監査役を最後に平成14年に琉銀関連グループのＩＴ総合情報サービス会社である株式会社リウコムの社長に転出し現在に至っている。

思い返せば、首里キャンパスでの学生生活の多くの経験がわがサラリーマン人生の原点になっているように思える。現在でも何故か首里城に足が向くのも、そのせいかと思う。家庭教師のアルバイト（月額25ドル）で学費と多少の小遣いを稼いだこともあり、学業や那覇高校１年生の頃から始めた剣道には比較的まじめに向かい、学生運動には積極的には参加しなかった。遊ぶ時は悪友たちと朝まで遊びほうけた。剣道では１年次の時に沖縄県代表で山口国体に参加できたことが奏功し、２年次には剣道部の副部長に、３年次には部長になった。文武両道の４年間は私の性格行動を大きく変え、後の人生に大きな影響を与えた。

勝つことへの執念、こつこつ積み上げる忍耐力、改革へのチャレンジ精神等々の基盤が、この４年間で醸成されたと思う。中学や高校の２年生まで消極的で気が弱く健康にも自信がなく虚弱体質の私が心身ともに頑強になれたのも大学生活の大きな成果である。このことは卒業後の銀行業務を遂行する中で、私の大きな力となり多くの影響を与えることになった。還暦を迎えた現在も、この姿勢信念は変わらない。進む学び舎が異なっていたならば、今の私はなかったと思うと母校琉球大学に縁（えにし）があったことに心から感謝をしたい。

また、高校時代からのペンフレンドである信州の今井まりさんとは特に大学時代に心の友として交流を深め私の心の支えになってくれた。卒業３年後の昭和45年にまりさん結婚、人生の伴侶として現在まで35年間私を支え続けている。

創立50周年を迎えた琉球大学同窓会、卒業生は６万人を突破し今後も拡大を続ける。同窓生は県内はもとより国内外で産官学の幅広い分野の多くの階層で活躍している。情報ネットワーク社会が進化する中、この膨大な人

的資源や情報源がネットワークとして機能していけば、これからのユビキタスネットワーク社会で無限の可能性を生み出していくものと夢が広がる。大学院大学の創設や世界トップレベルの国際会議等の開催が進展し、今後益々グローバル化していく沖縄に世界の目が向けられていく中で、母校琉球大学の役割と国際社会からの関心も大きく変化していく、この変革への適切な対応がなされれば「有能な学生や教授陣を集める大学から国際規模で集まる大学」に変貌していくのではないだろうか。そうなってくればわが同窓会の母校に対するバックアップ体制は益々その重要度を増していくものと確信している。創立50周年の節目に創立100周年に向け、母校離れをしていく若い世代にも魅力的関心の持てる琉球大学同窓会の限りない発展を祈念すると共に母校へのご恩返しと感謝を込め、これからも微力ながら何らかの形で同窓会活動には関わり協力していきたい。

1967年２月大学生協食堂前で全員就職先も決まり卒業を待つ面々。（坐っている中で右端）

1968年１月首里キャンパスで心の友今井まりさんと７年目で初対面

1964年11月剣道部副部長で２年次の頃（中列右から３人目）

母校・琉球大学への期待

琉球大学同窓会副会長
高　嶺　善　包
17期　法文学部商学科

現在は過去の歴史の上に成り立ち、未来も常に現在を含む過去の延長線上にある。森田孟進学長は「学長インタビュー」（文部科学教育通信2003号№75）で琉球大学の創設の歴史に立ち、その成果と将来構想について「地域特性と国際性を鮮明に揚げ教養教育を重視した英才教育を推進する」と語った。

時代は既に21世紀を開いた。新たな時代の命題として「人類と自然との共存共栄」という目標が掲げられた。その為の人類最大の課題は「人間の傲慢さの克服」であるとされた。

地球文明興亡の歴史において、現代文明はイギリスの産業革命に端を発し、欧米列強による植民地支配時代とともに西欧文明は地球を覆い尽くすかに見えた。

しかし、第二次世界大戦がもたらした犠牲、すなわち、広島と長崎の原爆、沖縄の地上戦、サイパン島などの太平洋諸島の玉砕等、人類は甚大な犠牲を払って植民地支配時代を終焉させ、世界はいわゆる戦後の現代を迎えた。

私たち人類は、戦後の僅か60年の間に、産業革命から端を発した物質文明を進化発展させ、結果として、地球環境・自然環境破壊の限りを尽くし、人類と自然との共存社会を崩壊させる寸前にまで地球を追い込んだ。

このことに対して自然界は、地球の自浄作用として、スマトラ島沖地震津波、新潟地震、福岡玄界灘沖地震、エルニーニョ現象、異常気象等、度重なる自然災害を起こし警鐘を鳴らした。また人間社会では、ニューヨークの９.11同時多発テロ事件に端を発して、アフガニスタン侵攻、イラク戦争を引き起こし、世界的なテロ事件の蔓延により、世界平和は大きく揺らいだ。また、尼崎列車事故に象徴されるように、物質文明の究極のその果てに、管理型社会、超スピード社会、弱肉競争社会がもたらす数々の歪と軋轢が噴出した。

日本国は国家財政破綻を回避せんが為、平成の大合併とともに、財政の三位一体改革や郵政民営化などの日本列島財政構造改革を協力に推し進めている。戦後60年を経て日本国憲法の改正論議が進む中、世界では新たなローマ法王が誕生した。

これらの現象は、世界植民地支配時代を終焉させ、新たな時代を開いた第二次世界大戦にも匹敵するものであり、物質文明の終焉とともに、新たな文明、新たなる時代への時代転換が進んでいることの警鐘とも言えよう。

このような、歴史的な時代転換の時を迎えたこの21世紀初頭において、沖縄の果たす役割、即ち、琉球大学の果たす役割が大きく期待される。

「学長インタビュー」で森田学長が発信された「歴史と地域特性に根ざし、国際性豊かなアジア太平洋に顔を向けた大学を目指し、太平洋地域の島嶼国との連携協力を推進する

琉球大学の将来像」、伊波美智子法文学部教授の提唱する「エコキャンパス行動宣言」すなわち「私たちは、自然との共存、人との対話を通して思いやりの心を育み行動します」は、国立大学法人化よる「新生」琉球大学の役割と方向性を表わしている。

学長、そして教職員各位が一体となって、学生と共に、関係機関との連携を図り、冒頭に掲げた21世紀の命題「人類と自然との共存共栄」と、人類の最大課題である「傲慢さの克服」を沖縄から、世界に大きく発信してくれることを期待したい。そのことの為にも、琉球大学同窓会は母校と共に車の両輪的存在としての役割を果たしたい。

琉球大学同窓会50周年記念にあたり

大　湾　知　子
32期　保健学部保健学科

私の生涯にとって非常に重要な意味ある琉球大学同窓会の創立50周年記念を保健学部最後の12期生としてお祝い申上げます。保健学部は現医学部の前身であり1968年（昭和43年）に、また附属病院（現沖縄県立那覇病院）が1972年に設置され、1979年の医学部設置に伴い医学部保健学科に改組されました。12期生の授業は教養課程が琉球王朝の址跡に建立された首里キャンパスとサトウキビ畑に聳え立つ新しい千原キャンパスで、専門課程は与儀キャンパスで大移動でした。私が現基礎看護学教室で学んだ３年の頃に与儀から上原地区へ移転し、尊い恩師と汗まみれに看護演習物品を梱包したのが印象深いです。1983年に移転完了、1984年（昭和59年）10月に12期卒業生を最後に保健学部は閉じました。1994年1月に琉球大学医学部跡碑が現沖縄県立那覇病院前に建立され、その石碑には歴史的経緯と琉球大学同窓会も刻まれています。それを拝むと病院で教えられた貴重な実習が唯一有り難く思い出され、今でも沖縄で貢献している病院建物を誇らしく思います。先人の苦労に感謝！初心忘るべからずを胸一杯に記念を振り返ると、琉球大学開学は1950年（昭和25年）５月22日記念式典は世界の偉人アブラハム・リンカーンの誕生日に因んで1951年２月12日に開催。1954年12月4日に琉球大学同窓会が発足され、2004年（平成16年）に目出たく創立50周年を迎えました。その記念行事は2005年2月10日に根路銘国昭先生（農学部10期生）による講演会、記念式典・祝賀会は、まさに50年前の開学記念式典と同じ２月12日に画期的に開かれ、歴史的真髄を伝えました。母校に思いを馳せて祝福に来られた県内外多くの方々が開学当時を身に詰まる思いで話され、母校の発展を献身的に祈り、産声をあげた琉球大学の写真や半世紀の伝統ある琉球大学逍遥歌・琉球大学の歌を直立して歌い、母校を大切に凛々しい姿はとても素晴らしく脳裏に浮かびます。そして２月19日に芸術祭が開かれ、沖縄県民と変わらぬ手つきで県外出身学生の踊る姿には驚くばかりで、この琉球列島にかかわる芸能文化遺産が海を越えて伝授されるのかと思うと感慨無量でした。益々人間味がにじみ出る愛情と思いやりは、私の心の師表にもなりました。同窓会では50周年を記念して琉大ウェアー、Tシャツを制作し生協と病院売店で販売しています。私は市民公開講座を主催し、講師陣と学生ボランティア21名にそのTシャツを着て頂き一般市民に社会奉仕として講義を開きました。さらに泌尿器科小川由英教授は40枚を国際フォーラムや日本国際協力事業団の外国人にプレゼントしました。国際社会に普及する恩師の姿から国

民度が高まった気分にもなりました。思えば、私の留学先大学売店ではオリジナル大学グッズ（Tシャツ、バック、コップ、卒業記念18Kリング等）を販売しており、帰国の記念に買いました。これ迄、琉大グッズが無く寂しい思いでしたが、琉球大学同窓会事務局の皆様が母校の発展に尽そう！と善意を抱き「琉球大学ここに在り」を地道にアピールするよう努めている姿をみて将来の琉大に希望を持ち始めました。事務局の積極的な働きかけで私は益々、琉球大学に輝かしい一面があるという安心感と誇りを感じました。記念行事に参加する誰もが琉球大学同窓会というひとつの共同体の成員であることに喜びを感じ母校を大切に常に忘れないでいたいと思うようにもなります。同窓会の目的が、会員相互の親睦を図り、母校の発展に寄与することです。50周年記念事業はまさにその目的を達成しました。琉球大学にかかわる学生と同窓生、関係者の皆様から自由な発想と幅広い視野を一気に学ばせて頂き心から感謝いたしますと共に琉球大学同窓会の益々のご発展を心からお祝い申上げます。

日本環境感染学会賞を受賞して

私は保健学科卒業後に臨床看護を経て、保健学修士・医学博士の課程を修了。平成9年基礎看護学講師・附属病院院内感染対策室感染対策専門看護師を併任しています。

平成17年２月25日、神戸で開催された守殿貞夫会長主催の第20回日本環境感染学会総会で、木村哲理事長から第1回日本環境感染学会賞の表彰状を受けました。この受賞論文は「琉球大学附属病院における清掃作業員の視点からみた感染性廃棄物処理マニュアル作成に向けた検討、環境感染、Vol、18、№.２，１，９、2003」です。受賞の報告の際、事務職員から「この表彰は滅多に無い喜びで学会からの表彰状の価値は高いので医学部長へ報告して学報へ掲載してほしい。」と祝福をいただきました。その琉球大学学報（№.427）の学会賞受賞記事をご覧になった方々から「裏方への理解者がいて良かった。オメデトウ！」など喜びも受けました。今回、琉球大学同窓会事務局からも「琉大にとって名誉なことです。琉球大学同窓会創立50周年記念に因んで紹介したい。」とのこと、同窓生の私は暖かい祝福と励ましのお言葉を受けました。学報掲載の影響力は大きく、看護者、女性研究者そして同窓生として大切にされていることの実感が湧いてきました。今回、心新たに受賞のご報告を申しあげます。

受賞論文の内容は廃棄物処理や清掃作業員の針刺し事故防止など、清掃作業員への教育、実践を包含したマニュアルに関する研究論文です。その経緯として平成12年にダイオキシン類対策特別措置法の施行に伴い、附属病院での廃棄物焼却処理が全面廃止されるために、私は平成11年に沖縄県内の200床以上の病院施設に廃棄物処理方法についてアンケートによる調査を行っていました。その成果を平成12年3月に第一内科教授斎藤厚（院内感染対策室長）主催の第８回九州感染対策研究会シンポジウムにて「感染性廃棄物の管理と感染対策」として報告を企画しました。その際、高良武博基礎看護学助手の協力を受けて上原勝子看護師長や津覇浩子看護副部長が報告し

ました。さらに同年、文部省在外研究員として米国でも廃棄物処理に取り組んでいました。本学附属病院において清掃作業員が廃棄物を処理する際の針刺し事故が生じる度に、何とかしなければ、という危機感から清掃作業員の視点に立っての支援に取り組んできました。マニュアル作成には、取り扱う廃棄物の種類、担当者の役割、日常の廃棄物処理過程・業務内容・教育・事故時の対応などを考慮して検討を重ね、現在では事務部と協力のもと論文の内容が仕様書に書込まれて活用されています。そして医療従事者は感染性医療廃棄物分別処理の徹底が必要です。米国ではクリントン大統領が平成12年に血液取り扱い基準に基づき、職業感染によるエイズやC型肝炎を防ぐ「針刺し事故防止法」を制定し人間の尊厳を大切にしています。

このような状況の中、これまで看護系学会や日本環境感染学会では学会賞としての優秀論文を募集し表彰するなどの応募企画がありませんでした。今回、20年間の投稿論文からの選定であったこと、受賞にあたって、思いがけない喜びでした。それは、本当に天からの授かりもの、預かりものであるかのように思っています。寒い時でもいつも半袖姿で一生懸命清掃業に専念している清掃作業員の皆様のことを思い取り組んできたこと、働きがいのある院内感染対策室で仕事ができた幸運、琉球大学附属病院という人的資源に恵まれた環境によって育てられたゆえんと思っています。そして苦労して論文を作成発表したことが受賞につながったと喜び、関係者にお礼を申しあげます。今後も母校の発展に寄与すること、皆様から送られたエールをいつまでも大切に努めたいと思います。

第１回日本環境感染学会賞の表彰状

琉球大学同窓会五十周年記念にあたり

医学部医学科同窓会会長
増　田　昌　人
36期　医学部医学科

琉球大学同窓会五十周年を心よりお祝い申上げます。

私にとっての琉球大学同窓会は、平成9年から11年にかけて英国Wales大学に留学したときに、会報を英国までわざわざ送っていただいたことが印象に残っています。母校の様子や先輩の活躍が載った会報誌を異国の地で読むのはよい励みとなりました。同窓会に感謝し、何かお役に立てる機会があればと考えていました。それが、図らずも医学科同窓会会長を引き受け、同窓会評議員として推薦され、一昨年から一番若い評議員としてお手伝いすることになりました。現在はそのときの恩返しと思い、活動しています。

私が医学科同窓会会長となってからは、これまで疎遠だった琉球大学同窓会との連携を強化するよう活動しています。機関誌「南風」を通じて同窓会総会や記念行事への参加を呼びかけたり、比嘉正幸同窓会会長と宮城武久事務局長を来賓として懇親会にご招待し、ご挨拶をいただいています。

さて、医学部医学科は昭和55年10月に発足、最初の学生は同56年4月に入学しました。昭和62年3月に一期生が卒業してから、今春卒業の19期生まで卒業生は1,822名を数え、それぞれが医師として、または医学研究者として国内外で活躍しています。琉球大学の卒業生が沖縄県内の医師に占める割合は四割を超え、特に女性医師に占める割合は六割を超えました。現在の沖縄県において医学科同窓会は県医師会に次ぐ規模の医師を擁する団体となっており、医療界ではその役割や動向が大きく関心を集めるようになってきています。

今後はこれまで以上に琉球大学同窓会と連携して、同窓会の充実と琉球大発展のために寄与して生きたいと考えております。

以下に簡単に医学科同窓会の概要を記します。

発足：平成5年8月（全国で最も若い医学科同窓会）
目的：会員相互の親睦を計り、相互の連携に努め、併せて医学科の発展に寄与する
会員総数2,610名（平成17年4月1日現在）：
正会員（医学科の卒業生）（1,822名）
学生会員（医学科の在校生）（623名）
特別会員（医学科と医学部附属病院および関連施設の新旧の教授、助教授（165名）

主な活動内容：

1．　総会および懇親会（年1回　8月第一土曜日）

2．　評議員会（年3回）

3．　機関誌「南風」の発行（年2回　6月と12月）

4．　同窓会会員名簿の発行（年1回　12月）

5．　学生会員向け講演会（医師や研究者として現在活躍している卒業生が講師を勤める職業講話）の開催（年2回）

6．　新入生に対する情報誌「かりゆシーサー」の発行（年1回　4月）

7．　その他

歴　代　会　長：

田仲秀明、金城紀子、伊佐勉、健山正男（いずれも一期生）

連　絡　先：

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原161-7 ホワイトテラス101

電話：098-944-7445

FAX：098-944-7445

E－mailアドレス：i－dousou@nirai.　ne.jp

ホームページアドレス：http//www.ryukyu－medical.jp/cgi－bin/index.asp

琉球大学同窓会へ期待する

琉球大学同窓会関東支部長
渡久山　長　輝
８期　文理学部物理科

はじめに

琉大同窓会は、今年（2005年）創立50年を迎えた。同窓会本部の沖縄での諸事業の取り組みは、50年の節目に、すばらしい成果をあげたと思う。同窓会本部の役職員を始め、関係者の皆様に心から敬意を表したい。

琉大は2000年に建学50周年を経た、創学時は、米国占領下でもあったが、戦前から、沖縄には高等教育機関がなかったこともあり、その創立は、大きな期待と多くの県民の協力があった。当時の高校生の募金や募金活動も特筆される。

草創期の琉大では「植民地大学」と呼ばれながらも、教職員、同窓生（当時の学生）がともに、「教室の机や椅子を、米軍からもらった廃材を利用して作った」（同窓会報より）。

まさに、同窓生を含めた「手づくり」の大学として発展してきた「歴史」を感じる。

今年、創立50年になる同窓会も、１期、２期生を中心に、多くの会員が入会された３期生などご尽力された、創立期の先輩各位に心から感謝したい。

関東支部結成のころ

関東支部は、1987年（昭和62年）3月28日に結成された。

同窓会本部は、比嘉正幸会長の時で、琉大は、第11代、東江康治学長の時であった。

結成前は、同窓会本部からも呼びかけがあり（数回、数名の役員諸氏の東京での打合せがあったし、第１期卒の船越尚美氏（初代支部長、故人）や仲井真格、具志堅興三郎、中島政彦、桑江良奉の各先輩とともに、金城良雄、國吉眞正、砂川義信、宮城調春各氏に小生などが加わった。結成の話し合いがもたれた。

結成総会は、千代田区の日本教育会館で開かれ50数名の参加をえた。会則を決定し初代支部長に、船越尚美氏、副支部長、金城良雄、渡久山長輝、事務局長、砂川義信各氏を選出し、懇親をふかめることが出来た。

当時の課題は、関東一円に在住する同窓生の、氏名や住所を把握することであり、一年間の活動の重点をそのことにおいた。

第２回総会は、1988年３月に開かれ、見事に「琉球大学同窓会会員名簿―関東支部」が出来あがった。國吉眞正、砂川義信、金城良雄氏のご努力であった。

当時、船越支部長は、名簿の巻頭で次のような挨拶をされている。

「昨年２月、諸兄姉の多大なご協力のもとに発足致しました琉球大学同窓会関東支部は、本日満一歳の誕生日を迎えることができました。再び本会場に集い会員相互の旧交をあたためる機会を得ましたことは、私の最も喜びとするところであります。

昨年の創立総会において、お約束致しました同窓会名簿を本日お配りします。今回の名簿作成にあたっては、会員の住所、勤務先等連絡先の充実に重きをおき、金のかかる印刷製本を意識的に止めました。したがって、名簿の体裁や編集方法にはご不満の点も多くあろうと思います。しかし、会員の所在をできる限り多く捜し求め、382名の会員を掲載できました点は高く評価されると考えております。

（中略）

どうぞ皆さん、この会員名簿を大いに活用して同窓会本来の目的である会員相互の親睦を計ってもらうとともに、将来に向けて大きなエネルギーを蓄積し、益々母校の繁栄に寄与しうる関東支部に発展させようではありませんか」

少し長いが、関東支部結成の目的と船越支部長や当時の役員、会員の心意気が感じられるので引用させて頂きました。名簿はその後、改訂され、五版を重ねています。

支部総会は、今年で11回開かれ、その度に、同窓会長、同事務局長を始め、大学長のご出席を頂き、ご挨拶と親睦を深めて下さっています。また総会では、各界からの講演をお願いしています。

毎回歌われる「琉大逍遥歌」「琉球大学の歌」は、ありし青春の日々を想い、懐かしさと、同一キャンパスで学んだ同士の絆を強くしています。

歴代の支部長、事務局長名を記し、感謝と敬意を表し、今後の支部の発展を願うものです。（敬称略）

第一代支部長	船　越　尚　美（1987～1991年）
事務局長	砂　川　義　信・國　吉　眞　正
第二代支部長	國　吉　眞　正（1992～1998年）
事務局長	山　川　昌　昭・稲　葉　賢　治・喜友名　朝　昭
第三代支部長	渡久山　長　輝（1999～現在）
事務局長	喜友名　朝　昭・伊　禮　廣　子・島　袋　朝　順

副支部長の諸氏には、感謝し敬意を表します。

関東支部の昨今

昨今の関東支部は、２年に一度の総会・懇親会を、毎年の開催にし、総会での審議時間を短くする為に、事前に「報告・会計・事業計画」などを会員に明示し、総会では、意見や承認の手続などにしております。これは、講演会の時間と同窓パーティと変えた懇親会の充実を計る為のものです。

島袋事務局長の手によって、ホームページを開設しました。「琉大関東」でアクセス出来ます。総会、同窓会パーティ、諸事業など写真を豊富に載せてあります。「琉大の歩み」なども入れてあります。琉大のホームページでのリンクが出来きて幸いと思います。大学事務局に感謝します。各同窓会へのリンク（現在は、医学部、理学部、数学科がリンクされ

ている）をお願いしたいと思います。同窓会本部のHPが開かれることも希望します。大学の法人化後は同窓会との連携は極めて大切なことと存じています。

パーティに、琉球舞踊や琉球音楽を取り入れました。クイチャパラダンス主宰の仲本光正氏と比嘉千都代さんのご尽力があります。

新しく「ゴルフ同好会」を結成し、四回の大会を済ませました。総会やパーティや各事業の発展に、もう少し会員の参加をふやすことや、特に若い会員の参加、沖縄県出身者外の参加者をふやすことが今後の課題です。

おわりに

琉球大学が国立大学法人に変りました。大学のユニバーサル化と国際化、地域、特性化など、新しい経営や運営と独創的な研究や教育が求められています。

法科大学院や観光科学科も、森田孟進学長を始め、各位のご努力により設置されました。

今後の琉大の発展に、同窓生は心から期待いたしております。

法人化の目的も大学の独創性とその成果による活性化にあるのでしょう。

首里城跡のキャンパスで開学し、千原キャンパスへと、50年を越えました。同窓会も50年を経ました。これから将来への50年、百年を見据えた、希望と夢のある琉大と同窓会の発展を期待します。

第10回（平成15年10月18日）琉球大学同窓会関東支部　総会・懇親会

村山副学長ご挨拶

宴会風景

琉球大学同窓会関西支部の活動

琉球大学同窓会関西支部長
山　城　賢　孝
5期　教育学部教育学科

琉大同窓会関西支部は、平成2年（1990年）6月29日大阪市北区のホテル阪神に於いて設立総会を開いて第一歩を踏み出した。同窓生は37名参加し、来賓として砂川恵伸琉大学長、又吉慶次琉大同窓会事務局長、地元関西の大阪沖縄県人会連合会日吉松仁会長、沖縄県人会兵庫県本部上江洲久（知克）会長等が参列し盛会裏に終った。

設立総会には、先ず設立準備委員会が用意していた会則を承認し、初代会長に松村圭三（1期英文科）を選出した。会計年度は毎年6月1日より翌年5月末日とし、総会は年１回7月に行ない、役員の任期は2年とし、次の通り役員を選出した。

会　長	松村　圭三（１期　英文科）	幹　事	宮城　　晃（18期　経済学科）
副会長	成田　義光（２期　英文科）	〃	小渡　照生（在籍19期　物理学科）
〃	小浜　良子（４期　初等教育科）	〃	上原　仁吉（19期　電気工学科）
事務局長	山城　賢孝（５期　教育学科）	〃	仲村　　昇（20期　初等教育科）
幹　事	知念　信子（５期　体育科）	〃	伊波　利弘（25期　経済学科）
〃	津野紀代志（10期　商学科）	会計監査	上地　安昭（11期　教育学科）
〃	宮城　　進（15期　社会学科）	〃	沢岻　純子（18期　初等教育科）

設立総会は、一応順調にしかも和気藹々とした中でスタートし、16回の総会も重ねることが出来た。しかし設立までにはかなりの時間と「生みの苦しさ」もあったので、そのあらましと経過を大雑把に述べてみたい。

沖縄から関西の地に移り住むようになったのは関東大地震以後のことで、東京圏が学問や文化を求めて集っているのに対し、大阪圏は食扶持（くいぶち）を求めて来たのが殆どである。

当時大阪は東洋のマンチェスターと呼ばれ、織物産業が盛んで、先ず織物女工として女性が来た。又織物産業だけでなく造船や金属精錬などの鉄工業や製材業など日本第一の工業都市でもあったので、続いて男性も職を求めて関西に来た。しかし世相は不況のどん底へと向つていて碌な仕事はない。言葉は関西弁には十分通じない上に、学校教育も満足に受けてない二男、三男が口減らし、暮らし向きの立たない人たちがお金稼ぎに来ているのである。学問もなく言葉も十分通じない人たちの仕事場と言えば荷役作業や石炭運搬、ボイラーの缶焚（かまた）き、製材の雑役などの重労働に就くのがやっとのことと言う中で、世情はなお厳しく「琉球人朝鮮人お断り」の張り紙さえ見られたとも言う。沖縄を出る時は「手紙（ティガミ）よりもお金が先だよ（ユ　カンジィンドゥサチ　ド　ー）」と言って送り出されたとのエピソードを持った人たちは、どんな苦難にも耐え、忍んだ。沖縄の祖先伝来の「結

いまーる精神」を活かして新しい仕事も立ち上げたり、会社を興したり、村人会、県人会もつくりあげて行く。その県人会も有識者や高い地位にある官僚がつくったのではなく、食うや食わずの生活の中からつくり上げた苦渋の組織である。

私は昭和39年４月に来阪したが、県人会の中には琉大出身者は一人もなく、同窓生の情報を掴むのさえ困難な状態だった。来阪して一年を過ぎた頃、仲宗根政善先生からお手紙を頂き「永積安明教授が、やっとパスポートがおりて沖縄に来られるようになった云々……」とあったので、芦屋市の永積先生宅を訪問し、永積先生と何度か打合せをして、伊丹空港まで私の自動車で送り、沖縄に出発なさった。私が来阪して以来、初めて琉大関係で出会った人である。永積先生は、招聘教授として琉大で講義をなさることになっていながら、米国は危険人物として沖縄への入国を拒否し、一年七 ヶ月でパスポートが得られたと言う話題の人である。

次に琉大関係で出会ったのは成田義光（琉大２期、英文）さん。仲宗根先生が東京の学会の帰りに、京都在住の四女上原紀子さんを訪ねて来阪なさった折に私が仲宗根先生を万葉の故地飛鳥を案内した後に、当時大阪大学教授の成田さんに引き合わせて下さった。学生時代に成田さんとの面識はあったが話をするのは最初だった。

関西は、戦前戦中戦後もなお沖縄差別が残っていて、名前を代えたり、読み方を大和式にしたりする人さえ居る状態にあった。沖縄の本土復帰運動が盛んになる昭和40年代半ばからは、次第にアイデンティティを主張する人も増え、復帰後は色々な会合でも琉大出身者と出会えるようになった。復帰後10年したら本土から琉大に受験する学生も増えるようになった。

昭和59年に仲宗根先生が「今帰仁方言辞典」などで学士院賞、恩賜賞を受賞なさった時、逸早く成田さんと相談し、関西でも祝賀会を持つことにした。「仲宗根政善先生の学士院賞、恩賜賞を祝う会」と銘打って、先生の出身地今帰仁村人会（高良武裕会長）、出身校の旧県立一中の養秀同窓会（長嶺將和会長）、最初に教鞭を執られた旧県立三中の南灯同窓会（玉城栄吉会長）、ひめゆり同窓会（新川初代表）、そして琉大同窓会（成田義光代表）の五団体が主催者となって呼びかけをして、６月18日、大阪市の「大閤園」で150余名を集めて祝宴を開いた。成田琉大同窓会代表は、仲宗根先生の業績を紹介し祝辞を述べた。琉大同窓生は、泉水朝見、上地安昭、大城善盛、小渡照生、翁長（具志）和子、金城盛紀、小浜（渡久地）良子、知念（新垣）信子、津野紀代志、成田義光、宮城喜久蔵、宮里徳英、宮城晃、山城賢孝、吉本哲夫の15名が参加。これをきっかけに同窓生の輪はかなり拡がり、情報交換は増えたとは言うものの他府県出身の同窓生はまだ一人も参加してない状態にあった。

それから５年程経って松村圭三さんが日本国際教育関西留学生会館の館長に赴任したのをきっかけに関西での同窓会結成への気運が高まって来て、大阪市の「格子茶屋」で平成元年７月14日に、同窓会本部の又吉慶次事務局長列席の下懇親会を持った。当日の出席者は松村圭三（１期英文）、成田義光（２期英文）、米田実（在籍３期理学部）、寿賀和秀（在籍４期社会）、山城賢孝（５期教育）、金城勲（13期法政）、宮城進（15期社会）、伊波利弘（25期経済）の８名で、又吉慶次事務局長の熱意にほだされ、同窓会結成に向かって大きく前進した。そして翌平成２年１月19日に大阪市大正区の沖縄料理の店「おもろ」に於いて新

年会を開催。35名が参加し、設立準備委員を選出。委員は松村圭三（１期英文)、成田義光（２期英文)、小浜良子（４期初等)、知念信子（５期体育)、山城賢孝（５期教育)、金城勲(13期法政)、宮城進（15期社会)、伊波利弘(25期経済）の８名となり、松村圭三氏を準備委員長、山城賢孝を事務局長に選任して、会則案などを作成準備し、６月29日の設立総会を迎えた。

松村会長が２期４年努め、平成６年の第４回総会で次の通り役員を選出。

顧　問	松村　圭三（1期　英文科）	幹　事	伊野波盛英（18期　機械工学科）
会　長	成田　義光（2期英文）	〃	宮里美智子（18期　初等教育科）
副会長	知念　信子（5期　体育科）	〃	上原　仁吉（19期　電気工学科）
〃	山城　賢孝（5期　教育学科）	〃	古波蔵邦子（19期　初等教育科）
事務局長	今村　　毅（17期　農学科）	〃	鳥越　紳一（39期）
同次長	小渡　照生（在籍19期　物理学科）	会計監査	津野紀代志（10期　商学科）
幹　事	小浜　良子（4期　初等教育科）	〃	仲村　孝子（22期 初等教育科）
〃	上地　安昭（11期　教育学科）		

３期目は成田会長を中心に発足し、４期５期６期と４期8年に亘って成田会長に苦労をかけた。その間、今村事務局長の転勤があったりして小渡照生事務局長、古波蔵邦子事務局次長と代わり、幹事に花田恵美子（18期初教)、嘉岡靖彦（28期法政)、堀本仁（29期)、山下和寿（29期数学)、の４人が代わった。新しい発想が注入され、会をもっと活性する為に「昼食懇親会」をもつことになり、平成９年10月25日に神戸市有馬温泉の「古泉閣」で１回目の昼食懇親会を催した。

関西同窓会の地域は、関西二府四県に留まらず東は愛知三重県、西は岡山広島県までの広範囲を擁しているので、会員が集まりやすいようにする為に、総会日は毎年７月第２土曜日、場所は沖縄料理の店「おもろ」、昼食懇親会は11月最後の日曜日と決めた。

第13回（平成14年）総会で８年振りに役員改選を行う。

顧　問	松村　圭三（1期　英文科）	幹　事	仲門　勇市（9期　法政学科）
〃	成田　義光（2期　英文科）	〃	津野紀代志（10期　商学科）
〃	金城　盛紀（2期　英文科）	〃	今村　　毅（17期　農学科）
会　長	山城　賢孝（5期　教育学科）	〃	裁　　亀吉（18期　機械工学科）
副会長	上地　安昭（11期　教育学科）	〃	古波蔵邦子（19期　初等教育科）
〃	宮里美智子（18期　初等教育科）	〃	仲村　孝子（22期　初等教育科）
事務局長	小渡　照生（在籍19期　物理学科）	〃	吉岡　靖彦（28期　法政学科）
同次長	伊野波盛英（18期　機械工学科）	〃	鳥越　紳一（39期）
幹　事	小浜　良子（4期　初等教育科）	会計監査	泉水　朝見（12期　電気工学科）
〃	知念　信子（5期　体育科）	〃	花田恵美子（18期　初等教育科）
〃	国吉　兼三（8期　林学科）		

第15回総会で役員は留任と決まったが、仲門勇市幹事の転勤による退任で、新たに上江洲愛子（8期初教）と藤本真也（38期法政）が幹事に加わった。

関西に琉大同窓会を設立して以来、大学当局は砂川学長、桂学長、森田学長が参列下さって、「大学の実情と将来の展望について」の講話をなさり、膝を交えての懇親を深めている。学長が公務で列席できない時には、副学長か他の要人を代行下さっている。又同窓会本部からも必ず会長、事務局長はじめ別表の通り役員が参列下さって交流を深めておる。組織強化費として毎年十万円也を支援して戴き、これの有効活用法として役員一同が無い知恵をしぼったのが昼食懇親会である。

関西には同窓生が200人とも300人ともいると言われながら、実際総会に集まるのは20人前後で、30人を超えるのは極稀である。堅苦しい総会（現在は和気藹々としてちっとも堅苦しくはないが）よりはもっと自由にざっくばらんな場をつくろうと言う発想で……

１、秋の一日を屋外の自然の中へ。
２、会員だけでなくその家族、友人知人の参加も自由。
３、会食費だけは本人負担で、残りの飲物代や入場入館料や浴衣代などの雑費は会が負担。
４、その地域の名所旧跡を見てから温泉に入り、ゆったりした気持で昼食をとる。

ざっとこんなことを目処に小渡事務局長を中心に伊野波盛英、宮里美智子レクレーション部で審議決定している。幸なことに関西の地は、古代人が万葉集と言う歌を残してくれているので、それらの歌を拾っていくのも一つの楽しみともなっている。昼食懇親会は序々に参加者も増えつつあるので、参考の為に懇親会で拾った万葉集の歌も一部揚げておきたい。

１回目　有馬温泉　古泉閣（平成9年10月25日）参加者９名
　〇しなが鳥　猪名野を来れば　有馬山　夕霧たちぬ　宿りはなくて　他七首
２回目　吉野山　旅館在古家（平成10年11月19日）参加者12名
　〇よき人の　よしとよく見て　よしと言ひし　吉野よく見よ　よき人よく見　他十首
３回目　京都嵐山　ホテル嵐峡館（平成11年11月26日）参加者10名
　〇この時は万葉集を拾う人が欠席で、歌はあったが拾わなかった。
４回目　奈良市白毫寺　高円山ホテル（平成12年11月26日）参加者13名
　〇石走る　垂水の上の　さわらびの　萌えいづる春に　なりにけるかも　他十二首
５回目　宝塚市武田尾温泉　紅葉館（平成13年12月2日）参加者15名
　〇吾妹子に　猪名野は見せつ　名次山　津野の松原　いつか示さむ　他八首
６回目　泉佐野市犬鳴山温泉　不動館口（平成14年11月20日）参加者12名
　〇大伴の　高師の浜の　松が根を　枕き寝れど　家し偲ばゆ　他八首
７回目　名張市赤目四十八滝　対泉閣（平成15年11月20日）参加者18名
　〇わが背子は　いづく行くらむ　沖つ藻の　名張の山を　今日とか越ゆらむ　他七首
８回目　大津市雄琴　湯元館（平成16年12月28日）参加者21名
　〇逢坂を　打ち出てゝ見れば　近江の海　白綿浜花に　波立ち渡る　他八首

この会には友人だけでなく小さい子供の参加もあったりして、家庭的な雰囲気もあり、琉大に関係ある方なら誰でも参加できますので、事務局へ申し出るだけで参加できる。

定期総会（出席者数と来賓の方々）

回	年　月　日	会員出席者	来　　賓
1	平成2年6月29日	37名	日吉松仁大阪沖縄県人会長、上江洲久兵庫沖縄県人会長 砂川恵伸学長、又吉慶次同窓会事務局長
2	平成3年7月13日	18名	砂川恵伸学長、平良善一同窓会事務局長
3	平成4年7月25日	20名	砂川恵伸学長、仲門勇市琉球大学庶務課長 和気政雄顧問、大城盛三会長、平良善一同窓会事務局長
4	平成5年7月23日	20名	砂川恵伸学長、垣花勝行琉球大学庶務課長補佐 大城盛三会長、平良善一事務局長
5	平成6年7月20日	19名	砂川恵伸学長、安室朝健琉球大学庶務部長 大城盛三前会長、比嘉正幸会長、友寄賢吉同窓会事務局長
6	平成7年7月21日	18名	宮城真宏学生部長、垣花勝行琉球大学庶務課長補佐 石原昌弘副会長、友寄賢吉同窓会事務局長
7	平成8年7月6日 32名		桂幸昭学長、平良勉琉球大学課長補佐 宜保美恵子副会長、友寄賢吉同窓会事務局長
8	平成9年7月5日 30名		桂幸昭学長、比嘉正幸会長、友利徹男同窓会名簿作成総括
9	平成10年7月4日	18名	桂幸昭学長 石原昌弘副会長、金城幸秀琉球大学企画室長
10	平成11年7月10日	20名	森田孟進学長 石原昌弘副会長、儀保博信同窓会総務部長
11	平成12年7月15日	28名	森田孟進学長、中里治男副学長、宮城清弘副学長 比嘉正幸会長、玉城健三同窓会事務局長
12	平成13年7月14日	33名	中里治男副学長、石原昌弘副会長、喜納安武同窓会事務局長
13	平成14年7月13日	20名	村山盛一副学長、山里純一教授 比嘉正幸会長、儀保博信同窓会総務部長
14	平成15年7月12日	23名	山里勝巳副学長、玉城忠同窓会評議員
15	平成16年7月10日	20名	平良初男副学長、比嘉正幸会長、宮城武久同窓会事務局長
16	平成17年7月　9日	23名	嘉数啓副学長、 比嘉正幸会長、比嘉美智子(会長夫人)、宮城武久同窓会事務局長

琉球大学同窓会宮古支部の沿革と活動

琉球大学同窓会宮古支部長
下　地　康　嗣
６期　文理学部化学科

一、宮古地区琉球大学同窓会の結成（支部以前）

宮古での琉球大学同窓会は昭和34年に結成されている。

ただ記録がないので当時の会長松原清吉氏（当時宮古水産高校勤務）にうかがいその経緯を記す。

１、 宮古地区の教員が中心となって結成した。

２、 同窓生としての親睦を図る。

３、 情報交換により仕事の効率化を図る。

二、宮古支部の活動経緯

昭和６０年１２月　６日	宮古支部結成総会	支部長	松原清吉氏選出
昭和６１年　９月２７日	第1回支部総会	学　長	東江　康治氏　講演
昭和６２年１２月１２日	第2回支部総会	医学部長	永盛　　肇氏　講演
平成　元年　２月１８日	第3回支部総会	教育学部教授	尚　　弘子氏　講演
平成　２年　３月１０日	第4回支部総会	支部長	嵩原　安雄氏選出
		教育学部長	島袋　　哲氏　講演
平成　２年　７月２７日	砂川恵伸琉大学長就任祝賀会		南秀同窓会と共催
平成　３年　６月２９日	第5回支部総会	法文学部教授	中山　　満氏　講演
平成　８年　５月１０日	砂川恵伸琉大学長ご勇退懇親会		
平成１０年　３月　８日	兼島清琉大名誉教授「勲二等瑞宝章」叙勲祝賀会		
平成１１年１０月１５日	池原貞雄氏元学長歓迎懇親会・水郷水都全国会議で講演		
平成１１年１２月2~16日	琉大開学50周年記念事業募金協力依頼 （各学校・職場訪問、依頼文書発送）		
平成１２年　５月１３日	琉大開学50周年記念地域還元事業「出前講座」への協力		
平成１３年１２月２０日	支部長懇親会（渡久山関東支部長、喜納安武事務局長）		
＊平成４年～平成１４年	支部総会開催されず（いわゆる休眠状態）		
＊毎年	琉大同窓会支部長会及び本部総会に出席（支部長）		

＊琉球大学開学記念事業募金協力

開学３５周年　　昭和６０年　５月　　２２８名（1,746,000円）

開学４０周年　　平成　２年　５月　　９１名（　860,000円）
開学５０周年　　平成１２年　５月　　１７９名＋α（各自で振り込む）

平成１５年　７月１９日　　琉大同窓会支部長会及び本部総会に出席
支部長会で「支部の活動状況報告」
同窓会定期総会で「同窓会宮古支部旗」を贈られる

平成１５年１１月２１日　　平成１５年度支部総会　　午後５時～９時
場所　クールレストラン
講話　「琉球大学将来構想」
琉大同窓会副会長・琉大名誉教授　赤嶺賢治氏

平成１６年　３月　６日　　親睦グランドゴルフ大会・懇親会

平成１６年　３月２８日　　平成１６年度琉大合格者激励会　　１５名（保護者を含む）

平成１６年　９月１８日　　平成１６年度　支部評議員会　　支部総会に向けて

平成１６年　９月２５日　　平成１６年度　支部総会　　支部長　下地康嗣氏選出
午後５時～９時
場所　クールレストラン
琉大同窓会長挨拶　　比嘉正幸氏
同　事務局長挨拶　　宮城武久氏
講演　「宮古の水について　自然と人との両面から」
琉大理学部教授　渡久山　章氏

平成１７年　１月２９日　　親睦グランドゴルフ大会・懇親会　３０名参加

平成１７年　３月３０日　　平成１７年度琉大合格者激励会
合格者１５名の内６名参加　保護者３名参加
支部役員等　１１名参加

平成１７年　４月２６日　　評議員会　支部活動の活性化について
１、大野山林を大切にする運動を立ち上げる
宮古唯一ともいえる自然林を保全しその意義をアピールする
水源涵養林、自然環境を学ぶ場所、国指定天然記念物等の生息場所
＊一般ゴミ、粗大ゴミ等の不法投棄防止
＊捨てネコ、イヌ、外来生物（クジャクやカメ類）は在来生物に影響を与えている。いわゆる生態系保全の問題
２、「地域こども教室」支援活動
宮古少年自然の家との連携
以上の活動等を推進していくことを決定

下地康嗣支部長　激励のあいさつ

平成16年３月６日（土）グランドゴルフ大会（宮古支部）